

---

# 独立戦争 ハウペン編

ルンメル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

独立戦争 ハウペン編

### 【Nコード】

N5622P

### 【作者名】

ルンメル

### 【あらすじ】

とりあえずジオン軍人の憑依オリジナル主人公の日常を描きました。原作からかなり脱線しています。ご都合主義、適当が嫌いな方は素通りして下さい

前史編とは別世界のガンダムの二次です。相変わらずの低文章ですが、まったりのったり行きます。

## 第1話、俺とハウペン（前書き）

本作は、ジオン公国前史編を前提に設定を進めていたものを中止し、もつたいないので憑依小説に大改訂したものです。

従って前史編より時代設定は原作に近いですが、やはりオリジナル主人公ということが重なり、新たなパラレルワールドという設定であることを理解下さい。

尚、本作は寛大な読者が対象であり、気に入らない方はすぐに回れ右をして、他の無数にある優良な小説に移動して下さい。

## 第1話、俺とハウペン

宇宙世紀0078、2月1日、地球からもっとも離れたサイド3  
II ジオン公国で、一人の優秀な指揮官が瀕死の重傷を負った。

ジオン公国軍突撃機動軍に属するヨアヒム・ハウペン大尉である。

ハウペンは運ばれた病院で医師達から必死の治療を受けたが、その努力も虚しく脳死に至った。

だが、まさにその瞬間、ある日本人がハウペン大尉に憑依したところなど、誰も気づかなかった。

そして、公式記録にはこう記された。

『ハウペン大尉は医師達の努力によって一命を取り留めた』と。

この物語はとあるアニメに似た世界で、ある日本人が人知れずヨアヒム・ハウペン大尉なる人物に憑依して、奮闘する様子を描いている。

〳〵宇宙世紀0078、2月7日、ジオン公国首都ズムシテイ郊外、公国軍、医官学校病院〳

目を覚ました俺には睡眠の充実感などなく、頭痛に悩まされた。

それでも俺は我慢してだるい体を起こした。

ここは簡素なベットの他に、小さな机と医療器具があるだけの白い……病室だ。

小さな机には、普段見ることがない花が飾られている。

そこで俺はベッドの脇にあるナースコールに気づき、ボタンを押しそうとした。

だが、その直後に更なる激しい頭痛に襲われた俺は、ボタンに手を伸ばすどころか、頭を抱えてうずくまるしかなかった。

この時、俺はハウペンなる人物の記憶の奔流にも襲われたのである。

二つの記憶の融合だ。

勿論ひとつは俺のもの。

日本という国でサラリーマンをしていた記憶である。

もうひとつはその俺がアニメと認識していた、機動戦士ガンダムに似た世界に生きるハウペン大尉なる軍人の記憶だ。

それぞれの記憶は俺の交通事故と、ハウペン大尉のモビルスーツ大破に遭ったところで終わっている。

唯一の共通点は共に死んでいてもおかしくない大事故な点ぐらいだ。

やがて頭痛は治まってくると、俺は誰を呼ぶことなく、ベッドで横になったまま自問自答を繰り返した。

ハウペン大尉の記憶の話が俺が訴えても、日本の医師免許を持たお医者様に信じて貰えるだろうか？

恐らく一笑に付されて終わるだろう。

事故の後遺症でアニメの世界、それも聞いたことがないキャラクターの生々しい記憶があるなど、本人の俺だって信じられない。

俺が医師なら真偽を確かめずに、このオタクが脳の障害で現実とアニメの境界が分からなくなったと判断するだろう。

だから、俺はこの記憶のことを話すわけにはいかないと結論づけた。

ただし、俺は前提をひとつ間違っていた。

そう例え変な記憶があっても、病室が日本にあるかどうかなんて疑問に持つ奴などまずいないだろう。

突然に病室に入って来たのは、白い制服を着た看護婦だ。

年の頃は二十五歳前後だろうか？ 非常に美人だが、俺がより気になったのは、明らかに西洋人的な金髪に蒼い目をしていることだ。

「失礼、看護婦さん。ここはどこかな」

考えるまでもなく本能が日本語で彼女に話しかけさせた。

だが彼女は一瞬呆然とした後、俺の質問に答えることなく、逆に

俺に英語で話しかけてきた。

「今、先生を呼びますから、安静にしてください。私の言うことはわかりますね？」

英語はヨアヒム・ハウペンなる人物の記憶のおかげでよく分かるが、何故に英語？と、こちらも呆けてしまった。

「大丈夫です。ここは病院です」

どうやら看護婦さんは、理解出来なかった俺の日本語を、パニック状態によるうわごとと勘違いしたようだ。

「失礼、今日は何年の何月、何日でしょうか？」

取り敢えず無難な質問を英語でしてみる。

「はい？ 今日宇宙世紀0078、2月7日ですけど、ハウペンさんが事故にあわれてから、一週間になります」

急にまともな質問をされて、一瞬驚いた表情を浮かべた彼女だったが、すぐに答えてくれた。

「……」

色々な意味で絶句するしかない。

ハウペン大尉、宇宙世紀、どこを突っ込めば良いのか、いやもう一度記憶を整理しないと。

急に黙り込んだ俺に、彼女も多少心配になったようだが、俺の意

識がすっかりしていることも有り、黙々と業務をこなしている。

だが記憶を整理しても、この事態に対する俺の考えは一向にまとまらなかった。

第一に声が俺の物ではない。

それからしばらくして、部屋に医師が入ってくる。

医師はまず敬礼した。俺もやはり体が勝手に反応して、答礼する。

「ハウペン大尉、私はあなたの治療を担当しているコーデ軍医中尉です」

やはり、俺はハウペン大尉らしい。

「そうですか。宜しく軍医。だが正直言つと事故あたりから記憶が曖昧です」

「突撃機動軍によれば、大尉はサイド3防衛隊の演習に戦闘機で参加中、事故にみまわれたようです」

そう言つて俺の顔色を見つめた。そして検査をすると宣言して、中尉はおもむろに医療用機械を取り出した。

「私の体は大丈夫なのだろうか？」

スツゴく心配だ。日本では母に『貧乏人の最大の財産は健康』と教わつて育つたのだ。

「大尉は戦闘機の事故の際、頭を激しく殴打しました。その為、意識が目覚めなかったと判断しています。」

ですが、こうして意識がはっきりした以上、もう大丈夫でしょう。体全体に力が入り、記憶に欠落が無ければすぐにも退院できるでしょう」

あくまでも冷静なコーデ軍医中尉が告げる。

「記憶はやはり事故前後が特に曖昧だ。他は無事のようだが」

実際はやばいどころか、重病かもしれない。

だが、俺はここジオン公国の医師にもだんまりを通すことにした。何故ならコーデ軍医中尉にあんたはアニメの脇役にもなれないなんて言ったら、オタクどころの騒ぎでないだろう。

そんなの俺の葛藤を知らず、コーデ軍医は明るい声で伝えた。

「事故前後の記憶が無いのは、あまり気にしなくても構いません」  
事実が事実だけに、そんな慰めみたいな言葉を貰っても嬉しくない。

だが翌日に俺はあっさりと退院した。

それでも数日間の昏睡状態を鑑みて、大事を取ったみたいだ。

それにしても、病院を追い出されたことは誤算だ。

あの衣食住が保証されるベットで、できれば今後の人生をゆっくりと考えたかった。

仕方なく俺はハウペンの自宅へと向かう。

その途上、俺は気づいた。

病院で意識があつた2日間に、誰もお見舞いにこないとはな…。

ヨアヒム・ハウペンよ。悲しすぎないか？

返答は当然ない。やはり俺がヨアヒム・ハウペンでもあるようだ。

何とかリニア式の公共交通網を乗り継いで、自宅についたのは病院を出てから2時間後だ。

下級士官専用の独身寮の1階に、それはあつた。

入るまで思い出さなかつたが、はつきり言って汚い。しかも怪我をする前の生ゴミまである……悲惨だ。

それから3時間、一心不乱に部屋を掃除した俺は、ある重要ことを思いだした。

そうハウペンの所属部隊の人事科と直属の上司への報告だ。

入院していた医官学校病院からも連絡がいつているだろうが、急

がねばならない。

慌てて通信機に走りよるが、もの凄く数の留守電が入っている。

どっちを取るべきか悩むことなく、俺はた録音を再生した。

何といつても重要な要件が、録音されているかもしれないだろう。

ついハウペンの記憶に声をかけてしまう。

『ピー、ハウペン、マンセルだ。事故にあつたそうだな。大丈夫か？』

渋い声だ。ハウペンの友達らしい。

『ピー、俺だ。ハウペン、突撃機動軍に容態を問い合わせても、機密扱いで埒があかない。無事なら連絡しろ』

どうやら、ハウペンの友人である士官学校時代の同期達が心配してくれらしい。

そう言えば、公式には戦闘機の演習事故となっているが、実際は機密のモビルスーツ演習だったからな。

突撃機動軍が箱口令を敷いても仕方ない。

『ピー、ウーデル中佐だ。ハウペン大尉、無事退院おめでとう。』

今日はゆっくり休みたまえ。ただし明日の午前中に一度、こちらへ顔を出してくれ。以上だ』

ふー。良かった。立派な上司だな。所でウーデル中佐？誰だっけ。  
ウーデル中佐は突撃機動軍、第7突撃モビルスーツ大隊の指揮官だ。

ハウペン大尉、つうか俺の直属の上司でもある。通称は確か…堅物君

ふつ。表面だけを見た愚衆が名付けそうなあだ名だ。

だが俺はウーデル中佐の内面に今、触れたばかり。

そんな俺が親愛を込めて新たなあだ名を彼に付けよう。

そう彼は今日から気が利く堅物君だ。

ウーデル中佐への感謝をそこそこに、俺は現実問題を考えた。

やることは一杯あった。

取り敢えず連絡をくれた奴らに無事を知らせ、記憶の整合をしなければならぬ。

何よりジオン公国なら俺は死にたくない。

そこで俺はハウペンの記憶を精査した。

そこで、ここはアニメや小説と歴史が違うことに気づいた。

ハウペンの記憶によると、この世界のジオン公国は、宇宙世紀0

078、1月に権力闘争の激化の果てに、軍の主力をドズルの宇宙攻撃軍とキシリアの突撃機動軍に分けた。

これは、拡大するジオンの軍備に懸念を見せる地球連邦への工作にもなった。

普段からの意見の対立が激しい二人だった為、連邦も単なる仲間割れと信じたようだ。

だから、両軍トップの対立で、競い合うような軍備拡大、特に戦力の少ない突撃機動軍の戦力増強は、地球連邦も非難すべきか頭を悩ませた。

結局、連邦軍の艦艇を増強させるだけで引き下がったのは、やはりサイド3の内乱を期待してのことだろう。

それに内戦とならなくても、軍の分割は国力の低いジオン公国の戦闘効率を低下させると踏んだようだ。

そんな現状をまとめながら、俺はジオン公国に必要なこと、特に一年戦争末期にあった改革をメモに記し、眠りについた。

## 第2話、俺はハウペン大尉

宇宙世紀0079、2月9日。

俺は所属する第7突撃モビルスーツ大隊の基地に向かった。

そこはズムシティの地下機密軍事エリアにある。

最後の検問所で、俺は身分証を顔見知りらしい衛兵に差し出すと、ジオン軍の基地へと突撃した。

すると、入り口ではハウペンの記憶にある人物達が待ち構えていた。

ハウペンの部下である第7突撃モビルスーツ大隊第2中隊の小隊長達だ。

「中隊長、ご無事で何よりです」

先任小隊長プロエル中尉が、3人の小隊長を代表して声をかけた。  
きた。

「ありがとう諸君。」

だがこの時間は訓練に当ててたはずだが？」

俺は記憶の中のハウペンがよくやっていたスタイル。

口をへの字にして抑揚をつけた声を真似た。

そうハウペン大尉として、髭を生やしたアジア系の中年マツチヨ士官に問いただしたのだ。

兵士から叩き上げである、苦勞人の先任士官プロエル中尉は苦笑を浮かべた。

「そんな…ハウペン大尉。

我々は大尉が退院したから出迎えに来いと、ウーデル中佐から命令されてきただけですよ」

彼の苦笑がいつの間にかニヤニヤ笑いに変わっていた。

俺は咳払いを一回して平静を装った。

無論彼らを咎める気などなく、最初が肝心とばかりに上司の威厳を見せようとしたのだが……。

まさかウーデル中佐の配慮とは迂闊だった。

「そうか。ならばよい」

ウーデル中佐、あんたは気が利く堅物君ではなかった。

単なるお節介な堅物君だと愚痴る訳にもいかず、俺は黙って苛立ちをこらえた。

「本当にお体は大丈夫なのですか中佐？」

3人の小隊長の紅一点、エリナ・クラベナ中尉が心配した声で、俺の体を気づかっている。

改めて彼女を見つめる。年齢24歳、身長160cm、スリーサイズ、勿論不明だがスタイル抜群のフランス系美女だ。

黒髪に吸い込まれる蒼い目、吸い付きたくなるような口……以上、ハウペン大尉の記憶よりのデータ？

「ありがとうクラベナ中尉。私は大丈夫だ」

部下とはいえ美女の労りに俺の頬は緩みっぱなしだ。

だが、未だにニヤニヤしている先任小隊長ブロエルの顔を見ると、平静を装った。

「それよりもブロエル中尉、中隊の方はどうだ」

「無論万事抜かりありません。計画通り部隊の練度は上がっています」

こいつはこいついう事では、冗談を言わないようだ、それに的確らしい。

「ご苦労だったな諸君」

そう言えばもうひとりいる小隊長がいた。

颯爽と軍服を着こなし、男の俺から見ても美男子だと納得してしまっ相手だ。

さらに士官学校を上位で卒業し、突撃機動軍司令官キシリア・ザ

ビ閣下の覚えもめでたい若き勇者、エイジ・ノリタケ中尉だ。

何か懐かしい名前だが、日系か？ しかも金髪茶目。西洋系ハーフだな。

「ノリタケ中尉、君も来てくれるとはな」

何故か俺は日本でも美男の部下が苦手だった。どう接してよいのかわからんだ。

「大尉、突撃機動軍から面会の許可がなかったので、心配しました」

どうやらハウペンはこの美男に慕われているようだ。

それに誰も見舞いに来ないのは当然のようだ。

突撃機動軍が入院先を隠蔽していたら仕方ない。

「ありがとう中尉、私は無事だ」

俺もすこし感動して、あのむさいプロエル中尉まで愛おしくなってきた。

「私はウーデル中佐に会わねばならない。諸君は部下の元へ戻りたまえ」

3人が敬礼する。

俺も感慨深げに敬礼を返した。

3人の見送りを受け、俺はウーデル中佐を訪ねた。

黒髪黒眼はよいとしても、髭を伸ばしたハンサムおじさんが、相変わらず似合わない銀縁眼鏡をしている。

年はもう40近いはずだが、体は鍛えられている中肉中背というところか。

それがお節介な堅物君ウーデル中佐だ。

「ハウペン大尉であります。御命令により出頭しました」

「おお、ハウペン大尉。無事な姿を見て嬉しいぞ」

満面の笑みを浮かべた中佐にややひきつつも、俺は感謝を口にした。

「ご心配をおかけしましたウーデル中佐」

俺もハウペンも常識人の評判を大切にしているからな。

「いやいや、こちらこそ素早い復帰に感謝しているよ。

何せたくさんの仕事が溜まっているからな」

えっ……。と、とりあえず話題を変えよう。

「それで、中佐、事故の報告はどう致しましょうか」

少し水を向けてみた。

「その件だが、キシリア閣下に直接報告することになっている」  
自爆したようだ。それにしても何故キシリアが？

俺はしががない大尉だ。向こうはザビの一員であり、気軽に会える相手ではない。

だが悩んでいる間に迎えは来てしまった。

俺はウーデル中佐と共に、ウラガン中尉なるどっかで見たような見なかったような人物の迎えで、コロニーの地上にあるジオン政庁へと連れていかれた。

キシリアはその執務室で仕事をしているらしいからだ。

俺にとっては、ただのアニメキャラクターに過ぎないキシリアも、ハウペンの記憶からはもの凄いプレッシャーを受ける。

間違えないように心の中でも、閣下を付けよう。

キシリア閣下…こつ心の中で呼ぶと、何故か俺も立派なジオン軍人という実感が湧く。

キシリア閣下の執務室近くに、シンプルだが品のいい待合室がある。

我々はまずそこに通された。

ここに入る前の保安体制ときたら、偏執なほど徹底している。

確か……。なんとかザビが、暗殺で命を落としたから、警戒しているのだろう。

残念ながらその名はハウペンの記憶で見つからなかった。

しかし遅い。

待合室で我々はキシリア閣下の手が空くのを、すでに30分近くも待っている。

俺は一応病み上がり。

少しは気を使えという不満を表せるわけなく、ウーデル中佐と一瞬に沈黙していた。

「キシリア閣下に敬礼」

突然、扉が開き、入ってきた人物を見たウラガン中尉が立ち上がって叫んだ。

その裏がえった声を突っ込む間もなく、ウーデル中佐と俺は、反射的に立ち上がって敬礼していた。

キシリア閣下、意外と美人だった。

だが彼女は危険人物だ。それを忘れてはならない。

「待たせたな。ウーデル中佐、ハウペン大尉」

キシリア閣下はその立場に似合わない丁重な声をかけてきた。

礼儀正しいキシリア閣下に、俺の生存本能は危険な香りを感じた。

「お気になさらずに閣下」

ウーデル中佐が頭を下げたので、仕方なく俺も頭を下げた。

「そうか、では私の執務室に来てもらおうか」

俺達はキシリア閣下に促され、彼女の執務室に入った。

「楽にするがよい」

執務室に着くともう一人士官がいた。

だがキシリア閣下は彼を紹介しないままソファーに座り、我々にも着席を促した。

「ご配慮ありがとうございます」

ウーデル中佐が何故か一瞬口ごもった為、俺が礼を言って座った。

何度も言うが俺は病み上がりだからな。

座るのに遠慮の必要性を全く感じない。

キシリア閣下の後ろに立つ、ウラガン中尉と顔色の悪い男は、何故か不機嫌な表情で俺を睨んでいる。

特に青つちろい方は、尋常じゃない目つきだ。

そう言えば、たしかまくべじゃなかったけ……

ハウペンの記憶を利用するまでもない。

俺の記憶が間違いないと言っている。

一応、大佐の階級証をつけているから、まくべは俺より遙かに偉いということか。

確か。名字はべだからべ大佐だな。

正直、彼は嫌がらせの達人だから、目を付けられたくない。

思わずさがるような目でウーデル中佐を見やると、まるで俺のことを異星人を見つけたような目で見ていた。

何かやらかしたか？ ただ礼を言って座っただけのはずだが……

「キシリア閣下、ハウペン大尉は病み上がりです。本題に入っては如何でしょうか」

俺が入院してたことを強調しつつ、中間管理職の達人ウーデル中佐が言葉を選びながら慎重に提案した。

だが、キシリア閣下は、私の態度に何か気にした様子もなく、普通に答える。

「ハウペン大尉、貴官を呼んだのは他でもない。事故を起こしたツイマツト社の機体についてだ」

これはやけに慎重な言い回しだ。

元々あの機体は欠陥を抱え、今回僅かな補修をした改良機がまた欠陥機だっただけの話だ。

「事故にあったパイロットとしては、あの機体を欠陥機と言わざるおえません。」

確かに不具合は小さくなりましたが、兵器としては不十分です」

当たり前のことだが、切れ者のキシリア閣下ならこれで十分だろう。

「そんなことは、分かっておる。改良に必要な点は何か気づかなかったのか」

まく・ベ大佐が青い顔をオレンジにさせ怒鳴った。

たぶんオレンジはまく・ベが怒った証だろう。

「さて、マ・クベ」

反論しようとする俺より速くキシリア閣下が先に口を開いた。

「ハウペン大尉、パイロットとしてではなく、ジオン軍士官として何か気づかなかったか？」

その質問は早すぎるよキシリア閣下。俺はハウペン大尉になってまだ3日目だ。

ジオンで生き延びるための計画も、昨日一晩で少ないガンダム知識を思い出しながら、走り書きしたメモしかない。

「キシリア閣下、事故については大佐にお答えしたとおりです。

ただ公国軍人として気づいたことはありません。

あるいはその領分を越え、ご不快を与えてしまう内容かもしれませんが」

はつきり言って拡張期のジオンで、大尉の俺がザビ家の人物に直接会話ができる機会など、そうないだろう。

リスクは高いが賭けにでるしかない

「ほう。何かあるなら言ってみろ」

キシリア閣下は面白そうに促したが、後ろに立つ男は、やはり不満そうで邪魔をしようとした。

「キシリア様、おたわむれも過ぎるのでは、次の予定もありますし」

「名誉の負傷をした勇者の提案を聞くくらい、よいではないかマクベ」

そう、俺は元気だが、一応危険任務中の負傷をしたばかりだ。

勲章だっでもらえるらしい…ただし表向きの受賞理由は偽装されるだろうが

「キシリア様がそうおっしゃるなら仕方ありません」

そう言って引き下がったマクベ大佐は、また俺を睨んできた。

「では、聞かせてもらおうハウペン大尉」

「まず、現在のMSパイロットがあまりに少ないことと、それに関連して、教官と二人乗りが可能な訓練用モビルスーツの生産が、非常に少ないことが疑問です。」

MSと戦艦どちらを主力兵器にするかは兎も角、モビルスーツを操縦できるパイロットの数を増やすことは、万が一の損害を考慮すると重要です」

俺が一生懸命に言ったことをキシリア閣下はただそうかと頷いただけだった。

「もっともな意見だが、予算の都合には限りがあるのだよハウペン大尉」

マク・ベが何故か食いついてきた。だがキシリアは先を続けさせた。

「他には、何かあるのかハウペン大尉」

何か声が冷たい、まさか気に入らなかつたからって処刑されないよぬ。

「はい、ジオン公国軍の兵器及び物質調達方法に疑問があります

各企業からすぐれた兵器を調達するのはいいとしても、それぞれがバラバラに部品から開発しています。

使用する部品に統一した規格を設ければ、量産効果は上がり、さらに部隊の運用効率があがると愚見します」

本来の発案者たる未来のまくべよ許せ、ジオンと俺の為だ。そもそもあの時期の提案じゃ役立たんのだ。

…まあ俺の提案じゃ、黙殺される可能性の方が高いようだが。

### 第3話、承認（前書き）

最近、自分の作品にキャラクター設定がないことに気づいた。あっても下手だが、とりあえず主人公の紹介

ヨアヒム・ハウペン、ジオン公国軍大尉

突撃機動軍、第7MS大隊第2中隊中隊長

身長175センチ、体重65キロ、やや筋肉質、肌の色は白、黒髪、茶眼の精悍な顔つき。

現在の愛機06C

他は後日、追加します

### 第3話、承認

「規格か…。着眼点は悪くない。マ・クベどう思う」

「キシリア様、私も同感です。

部品の規格統一だけでなく武装や操縦システム、  
場合によっては各企業が持つ技術も規格統一ができれば、生産性  
だけでなく運用効率もあがるかと思えます」

何故か唸るような声で賛同している。

「ふむ。ハウペン大尉、先ほどのパイロット訓練計画と規格統合  
計画の企画書をすぐに纏められるか…」

キシリア閣下には認められたが、ジオン軍の細かい調達計画など  
俺がわかるはずがない。

ましてギレンやドズルが納得するものにはならないだろう。

「恐れながらキシリア閣下、この改革には優れた分析能力と調整  
能力に加え、何よりも政治を知らなければなりません。

残念ながら私では役者不足です」

「良いのかハウペン大尉、提案が実行されれば間違いなくギレン  
総帥に目をかけられるだろう。

だが、システムを構築した者にかなりの功績を取られるぞ」

「私は構いません。もしキシリア閣下がよろしければ、そちらの

べ大佐が適任かと思いますが」

何故かべ大佐は、複雑そうな顔を浮かべた。

「ほう。私も選ぶならそう思ったところだ。

これでマ・クベも恐らく将官になれるだろうからな」

「ありがとうございますキシリア様」

「ふつ、礼ならハウペン大尉に言うが良い」

そう言って、彼に俺への礼を強制した。後が怖いから止めて貰いたい。

だが彼は俺がビツクリするくらい紳士的に礼を言った。

それを見たキシリア閣下も、満足そうに頷いた。

「マ・クベが将官になれば突撃機動軍に取っても大きな貢献だ、ハウペン大尉。」

そうだな、明日にでも少佐に昇進させよう。

それからウーデル中佐の麾下のままが良いから、マ・クベとともに計画を練り上げるがよい」

「了解いたしました」

あんな奴と四六時中付き合うのも大変だが、もしべ大佐が昇進を恩に感じず、さっきの紳士的な礼も上辺だけで、屈辱と感じていた

ら俺の身はさらに危険になる。

「ハウペン大尉、何か意見があれば申すがよい」

俺の恐れを不満と考えたのか？

まあいい、この際だ頼んでみよう。

「閣下、私は正直宇宙攻撃軍と突撃機動軍のライバル心はともかく、交流がほとんどないことが非常に気にかかります

互いにエース級の指揮官を交流させては如何でしょうか」

「そんなことか。考えておこう。だが今は規格の統一とパイロットを増やす計画を優先する」

「了解しました閣下」

「他に何か思いついた場合は直接私に言うが、マ・クベと共にくるがよい」

この後、俺はウーデル中佐と共に執務室を後にした。

キシリア閣下との会見が成功か失敗かは自分でもわからない。

正直自分でも緊張して何を言ったのか正確には思いだせないくらいだ。

だが2月10日、俺はキシリア閣下に認められ、少佐に昇進した。

当面は第2中隊の指揮官をしながらマク・ベ大佐の、いや、あの

後ハウペンの記憶で、本名はマ・クベ大佐と知った。

俺は臨時に彼の副官を兼任するよう、命じられた。

まず俺は部下のブロエル中尉を、中隊の臨時指揮官に任命し、俺の入院中様に指揮を取らせることにした。

そして、嫌々だがマク・ベ大佐の執務室に向かう。

そこには本人と副官のウラガン中尉がいた。

「クベ大佐、キシリア閣下のご命令により、ハウペン少佐ただいま着任しました」

俺は卑怯にもクベのクを微妙に小さくして、昨日の呼び間違いの失態をごまかした。

「よくきてくれたハウペン少佐、歓迎する」

クベ大佐はやたら上機嫌だ。怖いくらいの笑顔を浮かべている。

……不気味だ。

「ありがとうございますクベ大佐」

返答は無難なほうがよいだろう。

「少佐、私のことはマ・クベと読んでもらえるとありがたい」

何かクベと呼ばれるのは嫌なのか？

「了解しましたマク・ベ大佐」

「少佐は確か教導機動大隊の出身だったな」

クベ問題は終わったとばかりに、話を俺の話題にしゃがった。

俺はクベ大佐と呼ばれたくない理由をききたがったが、上官の質問を無視するわけにはいかなかった。

「はい、軍備拡大と宇宙攻撃軍及び突撃機動軍の創設により、年始早々にMS中隊長に任命され、現隊への異動となりました」

「そうか、ではパイロットとしても腕は確かなのだろうか」

答えにくいので、俺は沈黙した。たがベ大佐に答えはいらなかったようだ

「私もモビルスーツの操縦には自信がある。たまに訓練を付き合っ  
つて貰いたい」

勝手にほざきやがる。如何に上官の命令でも、これは本当に嫌だ。

勝つたらこいつは恨みそうだし、わざと負けるにしても俺は演技が下手だ。

ベ大佐は、敏感だから逆上されそうだ

「そうですね、私もマク・ベ大佐のようなベテランパイロットと  
手合わせできることは歓迎です」

そう軍の規律より元サラリーマンのヨイシヨ精神が、俺の口を滑

らすのだろう。

決まったとばかりに、頷くまく・べにたいした、俺は内心泣きたかった。

「では、本題に入るぞハウペン少佐、まずプロジェクトの名前だ。何か案はあるか」

「整備統合計画などは如何でしょうか」

ウラガン中尉は一言も話さず、書記に徹していた。

「それはいい名だ。うん、キシリア様も納得されるだろう」

べ大佐は大きく頷いた。良かった気に入ったようだ。まあ当然か。

「大佐、正式決定で宜しいのですか」

ウラガン中尉が確認してくる。整備統合計画という甘美な響きは、奴にはとどかなかったようだ。

「よしプロジェクトの名は決まった。後は任せておけハウペン、キシリア様の為にも私が必ずギレン総帥を唸らせてやる」

何か知らんが、自己陶醉している。

本当にキシリア閣下の親衛隊長ファンクラブみたいだ。

「お任せしましたまく・べ大佐」

一人で盛り上がっているみたいだが、速く退室したさに俺は恐る

恐る答えた。

「ああ、それからハウペン少佐にはキシリア様から命令がでてい  
る。

我々が書いた整備統合計画原案に目を通し、忌憚なく意見を言う  
ようにとのことだ」

キシリア閣下の配慮だろう。一応俺が発案者だし。

「了解しました」

「だが当面は、私とウラガンだけでよいから、連絡するまでは原  
隊の指揮をとるがいい。

なんなら我々の仕事ぶりを見てもよいがな」

まく・べが冗談を言うなんてな。イメージと違う……な……いかん。  
目がまじだ背筋がもぞもぞする。

ナルシストの考えることは俺には分からん。

「いえ、事故以来、部隊を放置していたので、できれば指揮を取  
りたいですね」

うまい理由だ。俺も自画自賛だが、これくらいなら奴のようにな  
ルシストにならないよな。きつと

「そうか、ではモバイルスーツの手合わせも、落ち着いてから頼む  
としよう」

一応配慮はしてくれたようだが、俺としては忘れて貰いたかった。

マ・クベの執務室を辞した俺は、第7突撃モビルスーツ大隊の駐屯地へ直ぐに向かった。

まずウーデル中佐に会い、現状を報告した。

彼は俺を中途半端な立場に置いたキシリア閣下の対応に、疑問を持ったようだ。

だが俺とマク・ベが大局的な任務にしていることを知っているから、やはり協力を惜しまないと言ってくれた。

そして俺が第7突撃MS大隊第2中隊、即ち原隊の演習を見に行くと言つと、断念して3日休暇を取れと命じた。

ハウペン率いる第2中隊はモビルスーツ3機編成の小隊が4個ある。

総数12機のモビルスーツ全部が06C型と言われるザクだ。

俺の愛機を残し、部隊は近くにある小惑星の内部に設けられた演習場に行っている。

帰ってくるのは4日後だそうだ。

そんな演習の話、俺は知らなかった。朝、プロエル中尉に会った後に決まったのか……。

疑問に思いつつ。俺は家に帰ろうとすると、第3中隊中隊長のアースル大尉に会った。

「これは、ハウペン少佐、昇進おめでとう」

同格だった同僚の昇進に対して、素直に祝福を送れるとはいい奴だ。

「ありがとうアースル大尉。これからも宜しく」

争いを好まない日本人の俺は、つい、意味なく申し訳ないと思う。

「ええ、任せて下さい。そう言えば何かあったのですか。」

朝になって急にウーデル中佐によまれたと思ったら、小惑星での演習を第2中隊と代わるよう命じられましたか」

あのお節介な中間管理職め、謀ったな。

「それはすまなかつたな。私が本格的に第2中隊に復帰するのは4日後なのだ。」

ウーデル大隊長は第2中隊を鍛えて私をビックリさせたのかもな」

仕方なく俺はお茶を濁した。

「あのウーデル中佐が…」

大尉は笑いながらそれは絶対ないと断言した。

俺も苦笑した。話題がそれたのはいいが穴が入りたい気分だ。

あのウーデルが一番やりそうにないことを例にあげてしまつとは  
な。

そんな思いを胸に俺は適当に話を切り上げ、アースル大尉と別れ  
た。

#### 第4話、革新、それは幻想か確信か

俺は軍の通信網を使ってマク・ベ大佐に連絡を取った。

休暇になったことを伝え、一応の許可を求めたのだ。

「了解した。ハウペン少佐、ゆっくりと休むがよい」

あっさりと承諾を貰った俺は、とりあえずやるものがなくなった。

何をするか。急に空白の時間が出来ると逆に困るのは、西暦でも宇宙世紀でも一緒だ。

家で寝るのもいいが、せつかく近未来の世界にいるのだ。観光を選択するのがベターだ。

まず、最大の観光地ジオン政庁は行ってしまったな。

ザビ家の私邸は…：うろつろしていたら変質者や反逆者に間違えられるかもしれない。

仕方ない宇宙港にでも行くか。

宇宙港…：そういえば俺は今、何故か未だに分からないが、近未来の宇宙に浮かぶ人工都市、スペースコロニーにいるのだ。

それも月軌道の外側にあるラグランジュポイントにあるサイド3である。

日本で事故に遭った当時のことを考えれば、人類で最も地球から離れた場所に立った人間かもしれない。

勿論、これには宇宙人に連れさられたと主張する人物達は入っていない。

だから、宇宙飛行士のように地球を外から観察するのは悪くない。  
ズムシティに展望台はあるのだろうか

俺は早速、端末を使って情報を集めると、ヒットした地下フロアにあるというズムシティ宇宙展望台に向かった。

平日の昼間だからだろうか。閑散としている広いエリアの奥に、目的の場所はある。

まず、見たのはやはり地球だ。本当に青く美しい。まさに母なる星に相応しい気高さだ。

だが俺は現実感がないせいか、あまり郷愁を感じなかった。

基本的に出不精で、さらに海より山の方が好きだった、俺の地球のイメージは、植物の緑か雪の白なのだ。

確かに美しい地球に視線は釘付けになるが、俺の頭の中では、ただ漠然とコロニーに住む人は、やはり地球に戻りたいのかなとか、本当に閉塞感があるのか？などと取り留めのないことを考えていた。

そして、俺は微妙な感動に満足して帰ろうとその場を離れ、別のフロアに移動した。

そこで、目に入ってきたのは、素晴らしい星空だ。

日本で見えた何十倍いや何千倍もの星々が見えるのかも知れない

ここから見る宇宙は地上とは違い大気やホコリに邪魔されない、  
純粋な光で彩られている。

一瞬のまたたきも知らない恒星と銀河の輝きは、宇宙と同様に果  
てしなく広がっており、見る者をただ圧倒する。

特に天の川は圧巻だ。正に先人がそう名付けた意味を、より深く  
感じらるだろう。

そんな星々の放った光は、宇宙では人の魂にも届くともいいうの  
だろうか。

俗物の俺でさえ、そう感じさせる荘厳な星々の輝きが、人類を革  
新に導くのだろうか。

少なくとも、俺はその導きを少なからず感じる。

大昔に宇宙で生まれた星々の輝きが、時間と空間を越え今という  
時に集まっていると認識するだけで、人類は大きく変われると思う。

他人から、それも重力に魂を縛られた人々から見れば、気まぐれ  
の変人が何を言っているんだと、一笑されるかもしれない。

だが、この何気ない魂への衝撃が俺をニュータイプへの道にいざ  
なうのかもしれないのだ。

二つの世界を知る俺が、そう確信するほどの衝撃的な光の奔流だった。

俺は一生、この瞬間を忘れないだろう。

例え、俺がニュータイプになれなかったとしても、いずれはコロニーに届く溢れる星の輝きが、スペースノイド全体を、いや人類全体を革新に導くだろう。

それから俺は展望台の閉館時間まで居座り、そして後ろ髪を引かれつつ、心に響く余韻に浸りながら、その場を後にした。

それから家にどうやって帰りついたのか、まるで宇宙に魂を置いてきたような疲れが俺を襲う。

全く思い出せないが、気づいたら朝で、俺はベッドで目覚めていた。

晩飯も食ってないし、風呂も入ってない。昨日の清々しさとおまりに対照的な不愉快な目覚めを向かえた俺は、暑いお湯をはった湯船につかりたくなった。

だが残念ながらこのハウペンの家に風呂はなく、シャワーしかないのだ。

俺は仕方なくシャワーで我慢することにしたが、口からは一人言でハウペンの風呂のない生活に毒舌を唱えた。

何故かそうなると急に風呂があった我が家を思い出した。

沸々と異世界憑依という非条理な現実を思い出しながら、俺は黙々とシャワーを浴びた。

人類が増えすぎた人口に対処するため、宇宙にコロニーを建設してから既に四半世紀が経っている。

我ら優良人種たるジオン軍人の家に、何故に湯船がないのだ。

一家に一基の湯船を持つのは、優良人種にだって必要不可欠だろうに。

それでもさっぱりした俺はシャワーを浴び終え、パンとコーヒーの朝食を食べながら、テレビをつけた。

いつものニュースがやっているみたいだ。

デギン公王がキシリア閣下を伴って、老人ホームを慰問したそう  
だ。

デギンが自身の体の4分の1もないような、痩せた老人達に励まし  
の言葉をかけている。

さらにキシリア閣下と一緒に寄付などチャリティーに参加してい  
る。

俺が勝手に決めつけていたザビ家のイメージを、何か裏切られた  
ような気分だ。

次のニュースは天気予報だった。晴れだそうだ。気象制御局の仕

事は完璧だから、間違いなく降水確率0パーセント。

よって俺はジオン文化と生活に慣れる為、街に繰り出すつもりだ。

それに、いちいち記憶を探って生活するのも面倒だし、普段のハウペンの休日を追うのも悪くない。

有効な休日になる計画を立てた。完璧な計画だ

だがそれはモロくも崩れた。

そう今、俺の目の前に座り、磁器のツボを片手に持ち、1時間もうんちくを垂れ流す奴によって……

奴の話に、いちいち頷きながら俺は自問自答した。

確か奴は、整備統合計画について相談したいことがあると言って、俺を呼び出したはずだ。

当然会ったら、打ち合わせをしたな。

それから、俺が家具を買いに行くといったら、よい店を知っているから、連れて行ってやると親切に申し出てくれた。

勿論、礼を言ったさ。そして丁重に辞退したとも。

だが、奴は満面の笑顔で遠慮するなといい、驚いたことに奴なり  
の親切心で、俺をこの店に連れてきたのだ。

そして俺が全く興味のない中国産のツボを見せて、その歴史を連

打で浴びせ、俺をノックダウン寸前にしたのだった。

「マク・ベ大佐、できればもう少し簡単な説明にして頂けないでしょうか」

現実を直視した俺は、思い切って奴、いやマク・ベにもっと説明を簡単にしてくれと頼んでみた。

奴は一瞬ムツとしたが、俺の顔をまじまじと見て、フーっと長いため息をつき、俺に謝罪した。

「すまなかつたなハウペン、こういう良い品に触れる機会がなかったのだつたな」

そして奴は何か憐れんだ目で俺を見ている。これを気にしたら負けだ。

我慢。我慢と言いつ聞かせる間に、マク・ベは別の品を怪しげな店主に用意させている。

マク・ベよ、俺はな新しいのを用意しろと言ったのではない、説明を簡単にしろと言っただ。

ふざけやがって、さっきまでの中国の壺の説明を我慢して聴いた時間は何だったんだ。

「このセットはかつてマイセンで作られた磁器で、一品もの意匠で作られた名品だ。

我々佐官の給与では五年分になるだろうな」

ふー。まあ、とにかく説明はだいぶやさしくなったな。

……ごー！、五年分の給与だと……ま。まさか買えなんて言わないよな。

あ、汗が吹き出しそうだな。俺は新聞の勧誘で、6ヶ月先の契約まで判を押してしまうタイプなのだ。

「素晴らしいドラゴンですね。マク・ベ大佐」

碧いドラゴン確かに素晴らしいが…、俺の馬鹿、馬鹿、何をほめてんだ。

一瞬、そこで俺の脳裏に未来がよぎったよ。

ニュータイプかな。

いや、高いマイセン磁器セットを抱えた俺が、風呂のない家にいる姿なんて絶対に悪夢に決まっている。

「ほう。ハウペンも素人とはいえ、目利きの才があるようだな。このドラゴンの価値が分かるとはな」

マク・ベよ、お前が散々吹き込んだうんちくに、何故かこのやら目立つドラゴンだけが触れられてない。

普通、誰でも気になると思うぞ。

「それからハウペン、プライベートではマ・クベと呼び棄てていいぞ。年も近いしな。」

私もハウペンと呼ばせて貰うからな」

何か上機嫌のマクベがトンチンカンなことを言い出した。  
ハウペンって、そういえばいつの間に、まさかこれからしょっちゅう骨董品のうんちくを聴けと言うのか。

「マ・クベですか。努力します……………」

気が重い。だが何か友情らしきものが芽生えたのか、とりあえずこれからは発音を直そう。

さらに上機嫌になって頷いたマ・クベは、骨董屋の店主を呼んだ。

「店主、気に入った。この品を包んでくれ」

えっ、お前が買うの……………」

いつからお前の買い物に俺が付き合うようにすり替わったんだ。ぼけ。

ふー。温厚な俺にそこまで突っ込ますなんて、恐ろしい男だ。マ・クベは。

そして奴は満足そうな顔で、仕事があると言って戻っていった。

独り残された俺は昨日とは違う意味で、魂を抜かれたような喪失感を味わった。

…これもせめて、俺をニュータイプにいざなっていると願いたい。

そして、俺は一応上司であるマ・クベの顔を立て、そこそこ高い  
…と言っても1ヶ月の給与の1割程度だが…ティーカップを買って、  
店を後にしたのだった。

## 第5話、英雄

宇宙世紀0078、2月11日、午後、賑わってきたズムシティ中央駅商業エリアにて

この場に似合わない軍服姿の俺は、馬鹿高いティーカップが入った袋を持ち、精神的ダメージで少しふらふらしながら、休む場所を求めて歩き始めた。

そこで問題がひとつ出た。何、たいしたことではない。

マ・クベの車で連れられて来たここが、中央商業エリアの地下部分ということ間違いないのだ。

勿論、俺は迷子ではなく、ただ単に自分の居場所を知らない人なのだ。

ここは軍人としてのハウペンのイメージ通りの冷静さで対処することにした。

どこかのおのぼりさんと間違われては恥ずかしい。

颯爽と軍から支給された携帯端末を取り出した。

軍人は緊急時の非常召集に対応する為、常にこれを持っている。

「……………」

何じゃこりゃ、どうやら重要な情報は、スパイ対策などで司令部

から手に入れなければならないようだ。

そして、残りの機能は……あえて言おうカスであると……

ちよつとことこの世界で言いたくなつた。

取りあえず落ち着きたいと思つた俺は、喫茶店に入ることにした。

そう、前方50メートル、右舷方向に喫茶店らしき店が存在している。

だが問題もある。今日の俺にはバリバリにアンティーク調の店は鬼門かもしれない。

そのレトロなレンガ造りの喫茶店の入り口で、俺は他を探すかと考えたが、何故か魂ごと吸い込まれるように入店した……。

「ランバ・ラル！」

入店したばかりの俺の小さな絶叫が店内に響いた。

まずい。思いがけない人物が居たので、つい名前を叫んでしまった。

「失礼だが、貴官とどこかでお会いしたかな？」

相変わらず渋い声だ。

いやそんなことより、私服姿のランバ・ラルが困惑した表情を浮かべている。

おそらく何か言わなければ警戒されるだろう。

いやもう充分に怪しい。ランバ・ラルとのファーストコンタクトで変人と思われたら、最悪だ。

「ラル閣下、申し訳ありません。以前軍で見かけたことがありましたので、遂、お名前を口に出してしまいました」

緊張で顔が土色になった俺は一生懸命に言葉を選んだ。

「ほう。そんな目立つ軍服姿で街をうろついてるならば……、そうなのだろうな。」

私の名は知っているようだが、ランバ・ラルだ」

僅かだが警戒を解き、さりげない口調で気さくに自己紹介してくれた。

「自分は突撃機動軍副司令官マ・クベ大佐付き先任副官、兼第7突撃MS大隊第2中隊長を拝命するヨアヒム・ハウペン少佐であります」

敬礼しながら俺は何とか、この無駄に長い肩書きを咬まずに言い切った。

それを聞いたラルの周りにいた人々が立ち上がって、慌てて敬礼してくる。

「ハウペン少佐、今の私はただの予備役少尉に過ぎず、あなたの

方が階級は上だ。

そんな私に閣下の称号はないだろう」

ラルは面白そうに目を光らせた後、ゆっくりと見惚れるような完璧な敬礼をしつつ、正論らしき事を口にした。

「申し訳ありません。ただ私に取ってラル殿は英雄であることは変わりません」

嘘ではない。俺の子供時代の英雄と言ったら、サンバルカンとラ  
ンバ・ラルだからな。

「ふつ。旧き英雄か。予備役士官である今の私には荷が重すぎる  
称号だな」

ラルはどうやら、俺が知らない時代のことと勘違いしたらしい、  
面白そうに笑っている。

そういえば、ラルって宇宙攻撃軍の士官になるんじゃないかっただけ。

……ひょっとしてこの世界のラルってフリーなのか

「失礼ですが、ラル少尉、軍を退役したとは知りませんでした。  
もしやお体は大丈夫ですか」

俺の心配は杞憂で、ラルは笑って否定した。だがラルの部下で柄  
の悪い連中の表情は変わった。

どうやら何故か怒りのツボを押したようだ。正直怖い。

「政治ですよ。少佐殿。全ては……」

「止めんかクランプ」

部下の一人が何かを漏らそうとしたのを止めたラルは、ややばつが悪そうに続けた。

「まあたいした話ではないのだ。ハウペン少佐。忘れてくれ」

「はあ、こちらこそ、縁起でもないことを……」

俺も失礼なことを言ったと気づき、謝ろうとした。

「ふつ。気にするな。それより良かったらこれから一緒に飲まんか。」

「ここはコーヒーも美味いが酒も悪くない」

些か、ぎこちない話題の切り替えだが、俺に取っては本当にありがたい申し出だ。

あの英雄ランバ・ラルと酒を飲めるのだよ。あー、この世界にこれほど本当に良かった。

そして、俺はあることに気づいた。

ランバ・ラルが予備役でフリー、ひよっとして人生最大のチャンスじゃないか。

俺の気分は皮算用で最高に舞い上がる。

「ラル殿、もしですよ。もしあなたを私が現役に復帰させることができたら、私の部隊に来てくれませんか」

はつきり言つて、唐突で馬鹿げた上に、成否も判らない曖昧な申し出だが、俺は本気だ。

「ハウペン少佐。気持ちはありがたいが、私は少佐のことを知らない。それに少佐の階級では、私を予備役から現役に移すことなど不可能だろうな」

ラルは冷静に問題点を指摘し、俺を諦めさせようとする。

「ええ。ですから私の申し出はあくまでも仮定ですよラル少尉、あくまでも私が勝手に挑戦してよいかということです。如何です」

それでも俺は粘った。最大のチャンス。その一心が俺を駆り立てる。

「ハウペン少佐、私に関われば今の地位を失う可能性もあるぞ」

俺の本気具合が伝わったのか、ラルは少し受け入れてくれたようだ。

「構いません。ラル殿」

自棄だ。俺はラルの制止を振り切りさらに食い下がった。

「……………」

この礼儀を無視した勧誘に、本気の粘りを感じたのかラルは考え込んだ。

俺とラル、そして周り空気に緊張がはしった。

加えてラルの腹心達には、何かを期待する表情で目を輝かしている。

「いいだろうハウペン少佐。

もし現役復帰ができ、貴官が信用に足る人物なら、部下として誠心誠意働かせて貰おう。

だが期待はあまりしないぞ」

落ち着いた力強い声で、ラルは約束した。

「有難うござ……」『オオオー』

俺の歓喜の返事は周りのラル部下達の太い歓声に飲み込まれた。

そして、そのままの勢いで彼らが始めた気の速すぎる祝賀会に、俺も巻き込まれた。

「ハウペン少佐、今度は自分に注がせて下さい」

断ることが下手な俺は、連中が歌う下手くそな歌を聴かされながら、黒ビールを大量に飲まされている。

悪酔いして、ラルに嫌われたらどうしよう。

いや、それ以上にラルと飲みながら語り合いたい。

それなのに何で俺は見知らぬラル部下達に囲まれているのだろう。

「おい、少佐殿。俺の酒が飲めないのか」

目の前にいる何とかという曹長が絡んでくる。

それをラルは笑って眺め、助けてくれない。

いや、それよりもさっきからこいつらが叫んでる下手くそ過ぎる歌。

良く内容を聞いてみたらジオン・ダイクンを賛美した歌に、ザビ家を中傷する替え歌を挟んで歌ってやがる。

あんなに酒を飲み交わした後では、俺がこいつらと他人の振りをして、誰も信じてくれないだろう。

このままでは、ラルを現役任用する為に命をかけるどころか、ラルの部下達による冒険的なザビ家への挑戦に巻き込まれて首が飛びそう。

「お前等、いい加減にせんか。少佐殿に失礼だぞ」

威厳ある鬼軍曹みたいなクランプ少尉の怒号が飛んだ。

すぐに騒ぎが静まった、やるなクランプ。俺はそう思いながらビールを飲み干した。

そして、今日の俺の記憶はこの後、なくなった。

## 第6話、クへの助言

宇宙世紀0078、2月12日、ズムシティ

前夜の酒が俺に頭痛を与える。

「ここは……」

俺は今、明らかに灰色の壁と鉄格子に囲まれた牢屋にいる。

「うん、夢だ。夢に違いない」

ベタだがほつぺたをつねった。痛くはない……いや、正確に言えば十分に我慢できる痛みだ。

よって無視して良いはずだ。

「リアルな夢だな」

俺は現実逃避しようとして呟いたが、ガンガンと響く二日酔いの頭痛が、間違いなく現実と教えてくれる。

「少佐殿。目が覚めましたか」

隣の牢屋から声がした。

振り向くと昨日俺に絡んできやがった奴等のひとりがいる。

「……誰だったかな」

首をひねりながら思いたそうとするがダメだった。

「ラル隊長の部下、アコース曹長であります。ハウペン少佐」

俺の一人言がバツチリ聴こえたのか、慌てた顔で自己紹介してきた。

「アコース曹長か、で、ここはどこだ」

「ズムシティ中央警察、第28分署の留置場です」

「やっぱり本物の牢屋か」

人生で初めて入ったよ。

「パブでクラブ少尉にあなたを送るよう命じられながら、このような次第になり申し訳ありません」

「あの喫茶店から出た後に、何かあったのか」

全く覚えてない。

アコース曹長が言うには、真っ直ぐ送ろうとしたら、悪酔いした俺がタクシーの同乗者達を拉致って二次会を開き、大騒ぎをした拳げ句に公務執行妨害で警察に捕まったらしい。

半分は最初に無理やり飲ませたこいつらが悪いとはいえ、何とかしなければ……。

「看守を誰か呼べないのか」

「騒げばきまずぜ」

そう言つてアコースは大きな声をあげた。

「うるさいぞ。静かにしないか」

すぐに制服警官がきた。

「君、私は公国軍のハウペン少佐だ。すまんが急いで、私の担当者を呼んでくれないか」

格好悪いが仕方ない。俺は身分証を彼に渡しながら頼んだ。

「……分かりました。少々お待ち下さい」

無視するか悩んだのが、しばらく身分証を見つめた看守は、大事をとつて上司に報告すると言つてくれた。

「ハウペン少佐、内務省特別警備隊、エラブ大尉であります」

一般警察ではなく、悪名高い内務省特別警備隊の管轄とは……全くついてない。

「大尉、私の罪状は何か、それから何時出られるのかね」

さりげなく聞いてみた。

「はい、罪状は居酒屋で騒ぎすぎた際の公務執行妨害ですから、

厳重注意で済みます。

誰か身元を引き受ける方がいらっしやれば、すぐに釈放できます。たいしたことではないようだが、それなら何故に内務省が動くのだ。

「ところで、私と一緒に逮捕された者達も出しやりたいが、いつそ見捨てたいがそうもいかない。

「はっ、釈放された少佐が身元を引き受けて頂ければ、すぐに釈放しますが」

「分かった、まずは通信端末を借りたい」

俺は直ぐに大尉の計らいで、留置場の外に出してもらい。警察の通信端末を借りた。

「カーデインか、俺だハウペンだ」

とりあえずハウペンの士官学校時代の同期を頼った。

「何だハウペン、まだ6時だぞ。朝っぱらから何のようだ」

もの凄く不機嫌そうな唸り声がする

「それが内務省に酒癖が悪いという罪状で捕まった。身元保証人になってくれないか」

間抜けな話を知られるのは嫌だが仕方がない

「酒癖？分かった。軍の回線と警察の回線を繋げば、すぐにだしてやれる。だが今度会った時に飯を奢れよ」

持つべきものは友人？だな。

「ああ。とにかく助かったありがとうカーデイン。それからこの件は秘密で頼む」

俺は直ぐに釈放になった。そして四人のラル部下を釈放させた。

「申し訳ありません少佐、それに助かりました」

アコースが代表して頭を下げた。

「気にするな。それからこのことは誰にも言うな。

今タクシーを呼んだからお前らはそれで帰れ。分かったな」

「了解致しました」全員が約束した。

「それから、これはタクシー代だ。取っておけ」

無理やりお車代を受け取らせ、俺は彼らと別れると。

先程の内務省治安部隊のエラブ大尉に会いにいった。

「エラブ大尉、有難う。色々助かった」

実際、役所仕事にしては速やかな手続きと思う。

「いえ、こちらこそ、キシリア閣下直属のハウペン少佐にこのようなご迷惑をかけて申し訳ありません」

緊張した様子で、エラブ大尉が謝る。

何か勘違いしているよな、それに泣く子も黙る内務省の特別警備隊にしては、あり得ない程の低姿勢だ。

「ハウペン少佐、あなたにはキシリア・ザビ閣下から出頭命令がきました」

相変わらず緊張感をたたえたエラブ大尉が……

今、何かおかしなことを言わなかったか？

「キシリア閣下だと？」

「はい、少佐にお話した通り、特別警備隊としては事を大きくする気はなく、速やかに釈放の手続きを進めていました」

「ほう、それが何でキシリア閣下からの出頭命令に繋がるのだ」

俺の声が冷たく響く。

「はっ、中央警察は我々とは指揮系統が違います」

今回の件は我々主導のはずでしたが、ここ第28分署の署長であるレダノ刑事部長が功を焦り、通常は行われない軽犯罪者である少

佐の身分照会を、突撃機動軍に対して行いました」

「恐らく署長のこと嫌いなのだろう。」

一切庇う気配を見せないエラブ大尉は俺の鋭い視線に申し訳なさそうに答えた。

「その結果、少佐の直属の上司である同軍副司令官マ・クベ大佐が、少佐の身元保証をされるべく乗り出していらっしました。」

恐らくはその際にキシリア閣下にも報告があったのかと思います」

馬鹿野郎何てことをしたんだ。俺はそのバカ署長の悪口を頭の中で何度か繰り返し落ちつこうとした。

「キシリア閣下の所に向かいたいが」

「直ぐに手配します」

彼はすぐに部下を呼び車を手配してくれる。

「それと、特別警備隊がわざわざ出てきた理由も知りたい」

この際だから本人に聞いておこう。

「それは機密事項ですよ少佐」

「まさかランバ・ラルがらみではないな。大尉」

大尉はとぼけようとしたが、他に理由はない。俺は確信した。

「私の口からは機密としか言えません……。しかしながらあまり彼らと付き合うのはお薦めできません」

一瞬迷ったエラブ大尉は、隠しきれないと判断したのか、小声で忠告してきた

「ありがとうエラブ大尉、今度、昼飯を奢ってやる」

そう言っただけで俺は連絡先を無理やり交換させる。

最近の俺はついてない。

理由が不明なまま別世界の他人に入れ替った上、何とか慎ましかに生活しようとする俺に、有り得ない事態が次々と襲ってくる

例えば、この世界に来てから僅か5日：自分でも信じ難い程濃密な日々だ。

そしてラルとの遭遇、この知遇は大事にしたいものだ。

「ハウペン少佐、お車の準備が整いました」

一般警察の制服を着た壮年が声をかけてきた。

「ありがとう。えーと」

名前を知らんな

「28分署の署長を務めるレダノ刑事部長です。お見知りおきを

ハウペン少佐」

お前だな、何がお見知りおきだ。その面。絶対忘れんぞ。

「さらばだ署長」

そうやって俺は署長が差し出した手提げ袋を不機嫌に受け取り、パトカーに乗り込んだ。

そして、キシリア閣下の執務室に向かう車中で、仕方なくマ・クベに連絡を取る。

「ハウペン。無事でなによりだな」

警察の備品は高性能だ。俺が連絡すると、上機嫌そうなマ・クベが高価そうなティーカップを片手に映像で現れた。

「手数をかけたなマ・クベ」

どうやら公私の私みたいだ、ただ非常に呼び捨ては言いつらい。

「ふつ。まさか警察が照会している間に、特別警備隊が釈放しているとは思わなかった」

どうやら報告がきているようだ。話が速くて助かる

「すまない。今、キシリア閣下の所に向かっているのだが、マ・クベに頼みが出来てな」

「ほう、言ってみるといい」

意味は解らんが奴の眉があがった。

「ランバ・ラルを部下にしたい」

「ブっ」

何か口からがふき出たぞ、マ・クベ。

「辞めておけハウペン、彼は反逆を疑われている。巻き込まれたら、出世も棒に振りかねない」

飛び散った液体を素知らぬ顔で拭いたマ・クベは、急に真顔になり忠告した。

「マ・クベ、俺はもう決めたのだ。だがキシリア閣下に会うまでに、妙案が浮かびそうにない」

俺はそこで、そこそこハンサムなハウペンのチワワ顔で困ったを表してみた。

「このマ・クベがせめて将官になるまで、待てんのか」

心が少し動いたがまだ心配のほうが強いようだ。

「すまんなマ・クベ」

俺の決意は固いのだ。

マ・クベは考え込み、策を練ってくれているようだ。

「ハウペン、お前を逮捕したのは内務省の特別警備隊だが、ランバ・ラルの周りには秘密警察やザビ家の私設スパイも監視している」

マ・クベは独り言のように呟くが、それくらいは俺も予想していた。

「分かっているマ・クベ」

「当然、内務省に影響力があるキシリア様は、お前とラルのやり取りを知っているはずだ」

策の説明をしながら、翻意を促してくる。

俺はそれでも力強く頷いた。

念のためにチワワ顔いや困ってるさん顔に切り替えた。

「結果は保証できんよハウペン、それでもよいのだな」

マ・クベ……お前はくどい

「ああ、頼む」

俺の決意が変わらないと知ると、マ・クベは完全に諦め、息を強く吐き出した。

「これからキシリア様に会ったら、恐らく何か欲しいものがあるかと聞かれるはずだ。」

ここは礼儀として辞退する方がよいのだが、今回はラルを部下にしたいと持ち出すとよいだろう」

流石に海千山千の男だ、妙な引き出しが多い。

それに彼の口振りは色々何かを知っている感じた。

まあ、マ・クベにも立場はある。これが精一杯なのだろう。

「分かった。ありがとうマ・クベ」

策とはいえぬほど単純なアドバイスだが、それだけに期待できる。

感謝しようマ・クベ。この世界のお前はもう大佐だけあって、ほんの少しかっこいいぞ。

「なに気にするな。それに近々私のパーティーがあり、ハウペーンが参加してくれば十分だ」

いや。お前はやっぱり、そういう奴だったな

「勿論参加しよう。だが俺はそういうことに疎い」

行く、行くさ。ランバ・ラルの為なら地獄にだって…パーティーにだって

「安心したまえ。誰か教育係りを向かわそう」

俺の心を読んだのか。まさか……。いや顔に出てるな多分。

「分かった。とにかくありがとう」

ふっ。俺はピエロになるぜ

だが、それも今日を乗り切っただけからだ。

## 第7話、ご褒美

キシリア閣下は早朝にも関わらず、執務室にいるそうだ。

彼らは少なくとも勤勉だった。

サビ家の人々を嫌いでも、怠け者と非難する者はいないだろう。

とりあえず俺はキシリア閣下の執務室の待合室に案内された。

ただ以前、通されたシンプルで品の良い待合室とは違う部屋だ。

まず目につくのは紫色の壁だ。正に理解出来ない色彩といえよう。

そこに掛かったジオン国旗が、一種の清涼剤になるとは、部屋のレイアウトを考えた者は理解しなかつただろう。

はつきり言って部屋に置かれた古そうなツボが可哀想になるくらいミステイクだ。

この部屋はひょっとして、拷問用に作ったのだろうか…いや、むしろ、何かの心理的圧迫をする為の部屋と考えるのが自然だろう。

それにしても、遅い。速く出してくれなければ、発狂しそうだ。

「ハウペン少佐、キシリア様がお呼びです。執務室へお越し下さい」

30才位の美人秘書が、俺をこの精神の牢獄から救いにきた。

「ありがとう」

彼女が女神に見える。今度お礼に食事を誘おう。いや、今はキシリア閣下だ

これが何かの懲罰の一環だったら、俺は恐らくヤバいことになるだろう。

それでも、俺はランバ・ラルの件ではマ・クベを信じて、キシリア閣下に突撃するつもりだ。

「キシリア様、ハウペン少佐をお連れしました」

秘書の報告にちらっと頷いた彼女は、直ぐに秘書を下がらせた。

「失礼しますキシリア閣下。ハウペン少佐、御命令により参上致しました」

部屋にはキシリア閣下だけでなく、マ・クベがいた。

「ご苦勞、ハウペン。昨夜は色々楽しんだようだな」

たいしたご挨拶だ……。

はっきり言って、返事に困ることを無表情で言うキシリア閣下の意図など、俺が予想できるはずない。

それとなくマ・クベに視線を向けたが奴も素知らぬ顔をしている。

「はっ、申し訳ありません」

黙ってる訳にはいかないの、とりあえず謝った。

俺的には無難な答えのはずだったが、無言で見つめてくる閣下の視線は心に突き刺さる。

「まあ、いいだろう」

あれ、キシリア閣下は何か納得してくれた。

まさか、今のが世間話だったわけ…ないよな…

「今日呼んだのは他でもない。ハウペン、お前が提案した統合整備計画についてだ」

はっ？、俺は整備統合計画にしたはずだが…

ウラガンの奴、まさか、書き間違えたのか。

「はい、何かありましたか」

「マ・クベの草案をギレン総帥に見せたところ、いたく気に入られてな。」

計画の詳細は総帥自らが中心になって進めることになった」

キシリア閣下は相変わらず無表情だが、恐らく僅かだが不満もあるのだろう。

「はい」

俺は非常に嬉しいが……

「無論、マ・クベとハウペンの功績は認められた。マ・クベは少将への昇進が決まった」

キシリア閣下の言葉にマ・クベは初めて俺に声をかけてきた。

「これもハウペン中佐のお陰だ。ありがとう」

何か体に鳥肌がたった。それに中佐？

「お気になさらずにマ・クベ少将」

俺がマ・クベの話聞き終わると、キシリア閣下は急に威を正した。

「ハウペン。お前は今日付けて公国軍中佐に昇進した」

俺、この間少佐になったばかりなんだが、佐官の階級がバーゲンみたいだけどいいのか。

「ギレン総帥は特にお前の功績を認め、褒美を与えることを決めた。さて何が良いかなハウペン。」

キシリア閣下、理由はわからないがさらに不機嫌そう。

それにしてもマ・クベ、お前全部知っていたな。何がパーティーだ。

いや今はそれどころではない。

「閣下、私の望みはランバ・ラルという予備校士官と、彼の元部下を直属の部下として頂きたいということです」

不機嫌そうなのは見なかったことにして、ずばり言ってやった。

『……………』 キシリア閣下は黙った。

「……………」

怖いから、とにかく沈黙しないで欲しい。マ・クベ、何とかしろ。

「全く、驚かされる褒美を所望された。マ・クベはどう思う」

ようやく、凍りついた部屋が溶けた。

「反逆者達を部下にしたいとは、ハウペン中佐も怖いもの知らずのようです。」

ですがラル家などいまさら害はないでしょうし、ハウペン中佐の可笑しな冒険心は買っても良ろしいかと」

マ・クベ、援護射撃ありがとう。あんまり嬉しくないけど

「そうか……………、いいだろうハウペン。ギレン総帥は私が説得しよう」

キシリア閣下は何故か、俺の望みを面白いと思ったようで、冷笑

でない笑顔を浮かべた。

「無理なお願い、お聞き届けありがとうございます」

閣下は頷き、おもむろに小箱を取り出し、中身の品を手にとった。

「ハウペン。これが中佐の階級章だ」

キシリア閣下は俺の制服に階級章を付けてくれた。

「ありがとうございますキシリア閣下」

これはやはり嬉しい。彼女の人心掌握術の一環としても、ギャツプに負けて感動してしまう。

「今日を持ってハウペン中佐の全職責を解き、新たに編成される突撃機動軍第12突撃MS大隊、大隊長に任命する。」

併せて専用艦として現在建造中のムサイ級軽巡洋艦ヴィルベルウインドウを与えよう」

「ありがたき幸せです。閣下」

でもムサイなんか欲しくない。

ハウペンもかつてムサイの指揮などしたことはない。

「マ・クベ」

キシリア閣下は、横でリラックスしている副司令官に、説明を促

した

「第12突撃MS大隊はまだ編成途上にあり、人員不足の大隊の編成は困難と予想される。」

そこで司令部は、ハウペンの指揮下にあつた第7MS大隊第2中隊を、第12MS大隊に移籍させることにした。

この部隊を中核に据えた上で、キシリア閣下の為に大隊を精鋭部隊に鍛えるが良い」

「了解です」

第2中隊を付けてくれるとはありがたい。これにラル閣下達もいるから何とかなるだろう。

マ・クベよ、お前の非常識なことはこの際目に瞑り、今日だけは感謝しよう。

「期待しているぞハウペン中佐」

キシリア閣下も今日はありがとう。

「必ずご期待に応えます」

しかし俺は、最近無難な答えしか思いつかない。

たまには気の利くことを言ってみたいものだ。

「それから公王陛下主催でマ・クベの少将任命式が明日行われる。」

その際、ギレン総帥の命令で、ハウペンが事故で負った傷を称える勲章の授与式も急遽追加された。」

「しかし、キシリア閣下、あの事故は戦時ではないですし、戦傷章は公王陛下から直接頂ける程の等級ではないはずですよ」

ふざけるな、準備なしにそんな式典に出られる訳ないだろう。

「ああ、そうだな。戦時ならば何千人が一度に受ける勲章だろう。

だが今回はお前一人だ。

それに加えてギレン総帥は、統合整備計画の提起について、第一級国家功労章も授けたいとの意向だ」

キシリア閣下は、忌々しさを隠さずに告げた。

恐らくはキシリア閣下の派閥にいつの間にか入ったらしい俺に、ギレン総帥がちょっかいをかけるのが気に入らんだろう。

## 第7話、ご褒美（後書き）

ギャグ路線の才能が自分にまるでないことに気づかされる作品になってしまった。取りあえずシリアスとの境界線をさ迷いそうです。

## 第8話、偉大なる勲章

統合整備計画、ウラガンのクリティカルなミスでその名前になったが、計画自体はギレン主導で無事推進されることになった。

一時的な現場の混乱によるデメリットよりは、量産効率、運用効率、機種転換効率、訓練効率など、規格統一のメリットが圧倒的だったからだろう。

さらに開戦までまだ時間があるからか、懸念した宇宙攻撃軍司令官ドズルの妨害はなかった。

逆に、モビルスーツの量産と操縦系統の統一、訓練用モビルスーツの増産に感銘を受け、積極的に賛成してくれたみたいだ。

その提案が功績と認められて、俺は僅かな期間で大尉から中佐になり、異例の出世を遂げたことになる。

そこで、有頂天になっていた俺に冷や水を浴びせたのが、ラル閣下の部下の一人だ。

そいつは情報活動を得意とする士官と紹介された。

最初に彼が情報収集してきたのが、宇宙攻撃軍の士官達に蔓延する犯罪行為についてだ。

そう最近、奴らの中に、俺のことをマ・クベの腰巾着と呼ぶ、おふぎけを通り越し、犯罪すれすれの行為に口を染めた連中が現れたらしい。

マ・クベの腰巾着…まさに宇宙世紀で最も悲し過ぎる渾名のひとつだろう。

まさか、自分にその渾名がつけられとは悲惨というにつきる。

それに、この渾名はウラガンにこそ相応しい称号、いや俺が奪って良いはずのないウラガンの為の称号だろう。

弁解すれば俺がマ・クベに自分から近づいた事実はない。

……いや、本当に昨日だけだ。信じてほしい。

流星にこの渾名は俺の心をスタスタにした。いや、そもそも、こんな情報を仕入れてくんなど言いたい。

その心の衝撃から何とか立ち直ったのは翌日になってからからだ。

宇宙世紀0078、2月13日、そんな傷心の俺は今、公王デギンの謁見の間にいる。

ここでは先に、マ・クベの少将任官の儀式が行われたばかりである。

そして、今度は俺の番だ。といっても佐官の認証式ではなく、事故の負傷に関する戦傷章と第一級国家功労章の授与式だ。

戦傷章は基本的に重傷者以外に適用されず、平時では大概が辞退するのが慣例である。

これまで全面戦争を経験していないジオンの軍人で、受賞したものは怪我で体の一部を失うなどして、第一線で働けなくなる後遺症があるものだけだ。

そう確かに戦傷章授与が決まった時、俺は医者も何時目覚めるかわからない昏睡状態にあった。

だから当然、戦傷章を自ら辞退できなかったし、重篤患者であったのも事実である。

問題は、事故の詳細を軍事機密扱いにされていること、そして何より今の俺が健康過ぎることだろう。

俺が昨日の夜、渾名のこと集中していなければ、せめて頭に包帯を巻いて参加することを思いついたのかもしれない。

そう戦傷章史上、最も無傷な受賞者…、それがよりもよって俺なのだ。

この謁見の間の両側には、マ・クベの式典に出席して、残るよう命じられた軍人や官僚、政治家など、ジオンの有力者達がいる。

彼等の冷たい目が一様に言っているように感じる。

……俺達だって暇じゃねー。そんなにびんびんしてやがるなら、辞退しやがれマクベの腰巾着め……

これに関してはニュータイプじゃない俺でも、感じとれるほどのプレッシャーだ。

「ハウペン中佐、前に」

そんな俺の思いに関係なく、侍従長の声が響いた。

俺は慌てて前進した。

……！、右手と右足……、左手と左足、…いかん何かが違う。手足が揃ってしまっている。

周りからは失笑が漏れてくる。だから急な儀式は嫌だったんだ。

そう言えば俺にせよ、マ・クベにしる突撃機動軍の士官だ。

それなのに何故、義務で出席している宇宙攻撃軍の連中が多いのだろうか。

ここは、仲間であるマ・クベと俺の晴れ舞台だ。突撃機動軍の士官が左右を埋め尽くすのが筋だろう。

……！、この会場にいるのは、マ・クベの少将任官式に参加した方々が大半だ。

その義務で参加した連中以外にいるのは、ウラガンや俺？を筆頭とするマ・クベ直属だけ、我が友、そしてひよっとしたら俺も突撃機動軍で嫌われてるのか……。

手足のぎこちない動きを何とか立て直した俺は、顔を真っ赤にしながら、巨大なデキン公王の前に立った。

「ハウペン中佐、こたびの軍備増強計画策定における、労をねぎらい、第一級国家功労章を授ける」

「ありがたき幸せ」

こんなメダルの為に、恥をかくとはついてない。

それに何故か、後ろで、功労章のことを知らなかった連中の静かなどよめきが起きてるし。

それを公王は一瞥で沈め、続けた。

「併せて、訓練中の事故によるケガに対して、戦傷章を授ける」

『……………』

場内は静まり返った。悲しく辛い。一応、俺の晴れ舞台なのに。

直後、ザビ家の席から、ギレンとキシリア閣下が拍手をしてくれる。それに釣られて拍手喝采となり歓声が上がった。

ザビ家への追従の拍手……、嬉しくなんかないが、沈黙よりは遙かにましだろう。

こうして、俺の受賞式は終わった。

せめてもの救いは第一級国家功労章に、幾らかの賞金と特権がついていることだ。

この恥はお金が癒やしてくれるかもしれないと、割り切るしかない

61

## 第9話、祝宴会

無事？、勲章を授与されたが、いまだに俺は自宅に帰れないでいた。

西暦の新聞勧誘隊を凌駕するマ・クベの強引な誘いを、相も変わらず断り下手な俺が、振り切れなかったことに尽きる。

「ハウペン、私から君との友情に対する贈り物だ。遠慮しなくて良い」

遠慮したいが、やたら真摯な顔で言われたら断れない。

それにマ・クベはどうやら自分の昇進祝いの会だけでなく、俺の祝賀会も勝手にプロデュースしていたらしい。

そうでなければ、こんな立派なホテルで開ける筈もない。

「それでは、これより偉大なマ・クベ閣下の少将就任を喜ぶ会と閣下直属の部下であったハウペン中佐の戦傷章受章を祝う会を始めます」

百人近い公国士官を集めた高級ホテルの広い催事場で、ウラガンの挨拶が始まる。

俺はと言うと、不覚にも戦傷章のフレーズで、先の授賞式を連想して固まってしまった。

まさか、ウラガンごときの一言で、俺の心が大ダメージを受けるなんて想定外だ。

俺が悶えてる間も、加害者のウラガンは涼しい顔で挨拶を続けている。

正直、ごますりの鏡みたいなのは内容は、突っ込みどころ満載だ。

最初に俺へダメージを与えた戦傷……いや某勲章のことを口にして、遥かに格上の第1級国家功労章へ言及しないなんて普通有り得ない。

恐らく奴のような図太い神経の持ち主には、某勲章を辞退したがる謙虚で繊細無比な士官の存在など想像できないのだろう。

それでも俺は、マ・クベの昇進を霞ませる勲章の存在で、困ったであろうウラガンの立場にちよっぴり同情した。

事前の相談がなかったことに対する怒りを必死に抑え、壇上のマ・クベの腰巾着を鋭い眼光で睨みつけるだけに済ませる。

直後何故か、ウラガンと目があつた。まさか奴は……んな訳ない。絶対有り得ない。

ウラガンは俺に何故か穏やかに笑いかけた。

「では、この場にいる最高位の士官であるハウペン中佐より、マ・クベ少将閣下に一言頂きたいと思えます」

急なウラガンのその言葉によって、奴に鋭い視線を浴びせていた俺の目は点になる。

そんな話、聞いてないぞ俺は……。

もう怒髪天をついてもおかしくない。

だが、一瞬で怒りは消えて狼狽だけが残った。

思考が混乱して怒りを持続できない。

いや、まずは名指しされた以上、壇上に立たねばならない。

俺はゆっくりと壇上に登った。

「マ・クベ少将、昇進おめでとうございます」

席から壇上まで牛歩戦術を駆使したが、これ以外、何にも思いつかなかった。

『……………』

何故だ、また静まり返ってしまった。最近の流行りか。

計算ではこの一言で拍手の嵐となり、俺は礼をして壇上をさる積もりだったのだが……。

マ・クベを含めた皆の衆は、やはり続きを待っているようだ。

ウラガンめ、何が一言だ。

だが2度も連絡ミスをした奴への報復は後だ。

今から急いでどころか、一瞬で祝辞を考えなければならぬ。

『えー本日はお日柄もよく両家の』……………いや待てよ、誰も結婚な

どしないな。

もう駄目だ。間がもたない。

「えー。実は私とマ・クベ少将は、えー、数日前に出会ったばかりです」

なんてことだ。まるで結婚式の祝辞だ。俺とマ・クベの馴れ初めを語ってどうする。

また、アホな渾名を付けかねられないぞ。

婚約者……。想像しただけで吐き気がしてくる。

何とか軌道を修正しなければ。

「その僅か数日の間でマ・クベ少将は、机上の計画を僅か数日で現実的な計画に纏め上げる快拳を達成しています。」

この功績でマ・クベ閣下は、少将に昇進するだけでなく、ジオン公国にとって必要不可欠な軍人であることを、改めて証明しました」

即答にしては満足できる出来映えだ。

そして俺は次に思い浮かんだ言葉を言いよどみ、沈黙する。

他にどうしても思いつかない。

「マ・クベ少将、正にあなたこそジオンの宝です」

死ぬ。いや、死んだかもしれない。

まず間違いなく、サラリーマン時代に培ったヨイシヨ能力は人類の革新前に限界値を超えた。

わき上がるマ・クベ軍団の歓声に、最早応える気力はない。

これで、俺をマ・クベの腰巾着呼ばわりするアホどもは確実に増える。

だが、少なくとも、マ・クベの婚約者という新称号を考える馬鹿は、きっと生まれなかったはずである。

肉を切らせて骨を断つみたいになってしまったが、貞操の危機？は去ったのだ。今はそれに感謝しよう。

「ありがとうハウペン中佐」

マ・クベが満面の笑みを浮かべて近づいてくる。

俺は微妙な笑顔で頭を下げ、二人でガシツと握手を交わした。

これから始まるマ・クベの演説を聞くために俺は、無事終わった安堵感を湛えて、壇上を軽やかに去る。

「まず、素晴らしい祝辞をくれたハウペン中佐に礼を言おう。

それから彼の叙勲もまた、皆の誉れだろう」

このマ・クベの言葉と皆の拍手を貰い、頭を下げる。

それにしても、ジオンの宝などと言われて、謙遜もせずありがたいとうと答えるなど、他の誰にも真似できないだろう。

そのマ・クベは壇上でいよいよ調子に乗り、力のこもった演説を続けている。

そのマ・クベの演説スタイルは摩訶不思議だ。

あいつは巧い具合に3分で話を区切り中断する。

すると直後にウラガンの音戸で俺達全員は、席から立ち上がって拍手をしないといけない。

そのスタンディングオペレーションは、マ・クベが手を上げる3分後まで続く。

それが延々と繰り返されるのだ。

だが、摩訶不思議なんて優しく思えたのは最初だけ。

それが何十回も続けば俺だって、『馬鹿やるつ』と叫んで、目の前のテーブルをひっくり返したくなる。

気づいたらマ・クベの演説が始まってから、既に3時間も経っていた。

普通に話を聞くだけでも疲れる長丁場だが、さらに俺達は実質1時間半も立って拍手をしている計算だ。

何人かの士官も殺意の籠もった視線を、自己陶醉しているマ・クベに向けている。

このままでは暴動になると心配する俺をよそに、元気なマ・クベの演説は続いていた。

「……、正にジオン公国は皆の支えで繁栄の時を迎えたのだ。

……これからもザビ家に忠誠を共に尽くそう」

もう内容なんて知らんが、どうやらさっきの中断から3分経ったらしい。

俺は何十回目かになる拍手をする為に、うんざりしながらも立ち上がる。

何故か今回の奴は3分経っても手を上げない。

4分、5分……腕が限界だ。

いい加減に銃を突き付けてでも、手を上げさせたい。

6分、もう駄目だ。その時、恐らく皆の心が一つになった気がする。それが通じたのかマ・クベの手が突き上がる

何のことはない。どうやら、演説はあれで終わりだったようだ。

皆がぐったりとしたように着席している。

俺も同様だ。最初のウラガンへの怒りなんて、完全に吹っ飛んだ。

2度とマ・クベ主催のパーティーに参加しない。そう俺は心に刻みこんだのだ。

会場は、ようやく食事が運び込まれて、場も段々と明るくなっていく。

一仕事をしたマ・クベは演説で汗をかいたのか、衣装を替えるとか言っって引っ込んだ。

その間に俺はようやく一息つき、のんびりと高級ホテルの巧い食事を堪能できた。

それに待遇も悪くない。

一応俺は、この場でマ・クベに次ぐナンバー2の階級であり、忘れられたもう1人のパーティーの主役なのだ。

たまに知らない士官が国家功労章おめでとうなんて、挨拶がてらに酒を注ぎに来てくれる。

しばらくすると、俺の平和な空間へ、同じテーブルのウラガンが近寄ってきた。

「ハウペン中佐、少しお話があるあるのですが、御一緒して頂けませんか」

「構わないぞ。あー。ウラガン大尉、そう言えば昇進おめでとう」

ウラガンも何故か中尉から大尉に昇進している。

「ありがとうございます。全てはマ・クベ閣下とハウペン中佐のおかげです」

「謙遜するな大尉」

と俺は大人な対応をしたが、内心深く頷いた。

ウラガンのした仕事なんて、俺がマ・クベに遠慮して整備統合計画と名付けた計画を、統合整備計画に書き間違えたことぐらいしか知らない。

『……！』 俺は思い浮かべた事実衝撃を受けた。

整備統合、統合整備、非常に似ているから、ウラガンはただ単に書き間違えただけと想っていた。

だが、ひよつとしたらウラガンは、原作を知っていて間違えたのかもしれない。

まさかなと否定しつつ、このアホな疑念が、俺の脳裏を離れない。

もし、そうならばウラガンに憑依するという、あまりに運の悪い同志かもしれないのだ。

そう思うと、ウラガンに対する気持ちも自然と柔らかくなる。

俺は少年のような好奇心の視線で、ウラガンの一挙手一投足に注目した。

「では、ご足労ですがついて来て下さい」

俺は、歩きながらも後ろから奴を懸命に観察した。

うーん、なんの収穫もないな。第一見て分かるわけがない。

「実はマ・クベ閣下の命令で、明日から週末まで昇進パーティーを計画しているのですが、ハウペン中佐の出欠を確認したいのです」

会場の端に連れてこられた俺に、ウラガンは振り向き様にふざけた話を持ち出してきた。

マ・クベは一体何回自分の昇進パーティーをやる気なんだ。

例え、後全部に参加する強者がいたとしても、それが俺でないことだけは確かだ。

「すまんが、私は新しい大隊の編成で忙しいのだ。マ・クベには悪いが辞退させて貰う」

この最悪なパーティーによって俺の断り下手スキルは進化の兆しを見せる。

「そういうことなら仕方ありませんね。」

となると、ハウペン中佐は休日の1回だけの参加と言うことですね

はー？、なんでそうなる。休日だって軍人には仕事あるぞ。

「週末？、何のことだ」

俺の疑問に、ウラガンが怪訝な表情を浮かべて、端末を確認する。

「やはり、中佐は出席になっていますが」

あくまでも俺を出席させる気が、またどうせウラガンの書き間違いだらう。

思えば、第2級国家功労章の件も、ただ単に忘れていただけかも知れんな。

「何かの間違いではないのか」

「いえ、この日の中佐の参加については、マ・クベ様直々に確認したそうです」

ウラガンは全く譲らない。

そう言えば週末のパーティーって、最近どこかで聞いた気もする。

「そ、そうだったな。勿論喜んで参加しよう」

思いだした。

マ・クベの野郎は昇進を知らせる前に、俺を昇進パーティーに誘う反則技を使ってやがった。

こんな調子ならピエロにはならないが、きっと休日のパーティーって、長時間に及ぶんだろっな。憂鬱だ。

「中佐、大丈夫ですか、顔色が悪いですよ」

「ああ、大丈夫だ。一応病み上がりだからな」

そう言いつつ、俺もウラガンに質問する。

「ところでウラガン大尉、君は連邦軍のガンダムという新兵器を知っているかね」

「ガンダムですか、どこかで聞いた気もするのですが思い出せま

せんな」

「どうやらお仲間ではなさそうだ。いや、答えがあいまい過ぎるか  
ら保留だな。」

「そうか。何でもない忘れてくれ」

警戒する表情のウラガンをこまかして、俺は席に戻った。

その後、祝宴会は大した盛り上がりもなく終わり、深夜1時過ぎ  
に幕を閉じた。

## 第10話、悲哀

宇宙世紀0078、2月14日早朝、何時ものベッドで睡眠していた俺は、悪夢で飛び起きた。

慌てて通信端末を使って日付けを確認する。

「ふー、間違いない。今日はバレンタインデーだ」

俺は安堵のため息を漏らした。

そう今日は、聖バレンタインを敬う日なのだ。

と言っても俺は、別にチョコを貰えなかったという生易しい夢を見た訳ではない。

何故か、マ・クベ主催の祝賀会に再び出席する夢をみたのだ。

あのマ・クベの演説を聞く直前に、強烈過ぎる危機感で目覚めたのも当然だろう。

夢と分かった後も続く、心臓に良くなさそうな高鳴る動悸もさることながら、悪い汗をかきまくった。

早速、気分転換も兼ねてシャワーへと向かうことにする。

『思えば、このシャワーとも、間もなくお別れだな』

シャワーを浴びながら考えてみれば、良いこともあったことを思い出す。

やはり昇給だな。まず大尉と中佐の給与の差はかなり大きい。

それに公国は国家功労章の2級に、家一軒建てられそんな額のボーナスをつけてくれる。

更にザビ家の私財からも、ラル殿の件とは別に、僅かだが報酬金も出るらしい。

某勲章に関しては……ムカつくことに雀の涙だ。

いやいや、鬱になるから良いことを考えよう。

そつだ。この資金で、直ぐに湯船のある部屋へお引越しよう。

うん、ハウペンには悪いがこの際、調度品も全部取り替える。

トイレ以外、全部和式にするのも悪くない。

そんな明るい計画を立てた俺は、ポジティブに悪夢を完全に振り払った。

そして、鼻歌を歌いながら浴室を出て、バスタオルを体に巻いて居間に目をむけると。

何故か視界に入ったソファに誰か、……多分後ろ姿から男が座っている。

いや誰でもいい。兎に角、緊急事態だ。治安部隊に連絡をしなければ。

だが、こういう時に限って、あの宇宙世紀のポケベルともいうべき軍支給の携帯端末が、よりにもよってソファアの前のテーブルに置かれているのだ。

自身の戦闘力に疑問のある俺は、犯人に飛びかかる案をまず排除した。

そこで、何か道具で犯人を驚かせた隙に、通信機をひったくってトイレに駆け込む作戦を採用する。

仕方なく俺は、体に巻いてあったバスタオルを手に取り、素っ裸で突撃する間合いを取る。

『3、2、1、……………』

いや、宇宙世紀では、ひよっとしたら家主に無断で家に入り、ソファアで寛ぐ遊びで盛り上がっているのかもしれない。

アホなことを考えて緊張をまぎらわせつつ、再び3からカウントダウンをしようとすると、その男は急に立ち上がって、こっちへ振り向いた。

「おはようございますハウペン中佐」

「あ、ああ、おはよう」

先日ラルに紹介された、碌な情報しか持ってこない公国軍情報部所属の士官のようだ。

思わずホツとして挨拶を返したが、何故、名前も忘れたこいつと素っ裸の俺が、互いに見つめあっているのか益々疑問になる。

「話は後だ。少し待ちたまえ」

慌てて、俺は着替えてきた。

「確か、ラル殿の部下だったな。何か緊急事態でもおきたのか」

「はっ、今回突然伺ったのは、ラル様が私と部下達を、ハウペン中佐の直属にすることをお望みだからです」

むー、ラルの要請なのか、だが、俺の家に不法侵入する意図と緊急性がまるで分からない。

「ラル殿から何も聞いてないが、どういふことだ」

宇宙世紀のジオン人は、事前承諾の文化を持たないのだろうか。

俺の知識によると、ラルは宇宙世紀最大の常識人のはずなのだが。

「恐らく通信機にメッセージが入っているかと」

そう言えば疲れて帰ってきたから、通信機を操作した記憶はないな。

確かにラルからのメッセージがある。

「ハウペン殿、夜分に失礼する。」

緊急で申し訳ないのだが、以前紹介した情報士官のタチ少尉が、ハウペン殿にどうしても仕えたいと申し出た。

彼の能力は私も保証するので、ハウペン殿の直属にすることを考慮して頂きたい。

明日、改めて連絡させて頂くが、ハウペン殿の都合の良い日に、私とタチに是非とも会って下さらないか」

真面目なラルが通信画面で語り掛けてくる。

名前はタチで、階級は少尉か？

まず、ラルの話には、どこにも今日、それも俺の家へ勝手に入り、ソファーに座って待つなんて話はないぞ。

ふざけるなと怒鳴りつけたいが、タチはよく知らんがラルの忠臣。

ぐつとこらえて、ラルの歡心を買いたい俺は優しく聞く

「ラル殿に、私の直属の部下になりたいと言ったそうだな。

真意はどこにある」

一昨日、こいつは、俺をマ・クベの腰巾着呼ばわりする連中がいと、嬉しそうに報告してきたばかり。

そんな奴が急に俺を敬愛して、部下に成りたいと思はずない。

「はい、実はここだけの話、ラル家の財政は火の車です。

今までは、ラル家を生き残らせる為に、無理をしても資金を捻出して、私のような者達を雇い、情報を集めてきたのですが。

ハウペン中佐のおかげで地位も固まった以上、情報網の維持は余分な負担。

そこで私はラル閣下をお願いして、ハウペン中佐のお役に立とう

と参上した次第です」

む、むむむ、俺はお涙頂戴な話に弱い。

話を整理すれば、ラルに迷惑を掛けたくないから、ウソをついて俺を頼ったということか。

だが、財政に苦しいとはいえ、あちらは腐っても名門、俺に用意できる資金とは桁違いのはず。

「で、幾ら必要なのだ」

俺の質問に、こいつは何故か具体的な金額を紙に書いてよこした。

その金額を見て、思わず俺は目を疑った。

諜報活動の資金が、偶然にも俺の国家功労章の賞金と同じだ。

「この数字、何かの間違いではないのか」

「いえ、当座に必要な金額に、間違いありません」

「……………。分かった持って行け」

絞り出すような声を俺は出した。

風呂とラル、価値は明らかだ。

とはいえ金持ちから一気に転落したのはショックだ。

「それから毎月の活動費が必要です」

厚かましくもタチ少尉は、紙をもう一枚手に取り、ひらひらさせている。

仕方なく俺は、渋々且つ、嫌々且つ、げんなりしながらも手を差し出し、請求書？を受け取る。

くそ、俺の大尉から中佐に昇給した給与額と、奇跡的に一緒だ。

泣く泣くこれにも同意した俺は、小金持ちからも転落した。

「ラル殿の為と思えば仕方ないな。それに優良な諜報網を利用してきるに越したことはない」

そう口にしながらも、苦い思いで一杯だ。

仕方ないと、何とか自分を言い聞かせていると、名案が浮かんだ。

うん、夕チにはウラガンの日常を監視するという大役を与えよう。何と言うか便所掃除と同じ位は、楽しい任務だろう。

「早速だが、マ・クベの副官にウラガン大尉と言うものがある。

彼に最近入院した記録がないか。

或いは可笑しな言動をしていた時期がないか、夕チ少尉が直々に調べてくれ」

「はっ、了解しました。

ですが、より大きな成果をあげる為、その目的を伺っても宜しいでしょうか」

まあ、俺なりの理由は勿論ある。

だが、真の統合整備計画の名付け親となったウラガンには、転生や憑依の疑いがある。

なんて夕チ少尉に言えはしない。

「訳は聞かないでくれ。ただ私には非常に重要なことだ」

あいまいにして話を打ち切り、ラルへの承諾の連絡と、明日の朝のブリーフィングを約束した俺は、彼を家から追い出しにかかる。

「話はこれで終わりだ。

それから、タチ少尉に言っておく。

次にここへ勝手に入ってきたいならば、麗しい女性を一緒連れてこい。

それが出来ないなら、外で待ちたまえ。いいな」

別に女性に飢えている訳ではない。

だが、バレンタインの朝に、こんな男がプレゼントされてくれば、そう言いたくなるのも男性諸君ならば分かってくれるだろう？

いずれにせよ、俺の新たな1日はこうして始まったのだ。

## 第11話、アナログ

不愉快な寝起きは過ぎ去り、俺はウーデル中佐へ会いにと、第7突撃MS大隊本部へ向かう。

勤務開始時間にはまだかなり早い。

だが、大隊長で苦労人のウーデル中佐は、勤務開始時間の30分前から執務を開始する。

ノックをすると、やはり何時もの堅い声で入室許可ができる。

「ハウペン中佐入ります」

丁度、ウーデル中佐は、部屋にうず高く積まれた書類の束と格闘していた。

うむ、題して書類と戯れるウーデル中佐。

余りに似合っている光景であり、俺は自然に笑みを浮かべてしま  
う。

ただ、本来は有り得ない光景だ。

いくらなんでも世は宇宙世紀。

地球から最も遠いジオン公国だって、書類のデジタル化を達成し  
ている……はずだ。

ギレン総帥だって、キシリア閣下だって、ついでにガルマだって、  
データパッドを使っていた。(ドズルは知らんが)

記憶にあるハウペンだってそうだ。

そう考えると、ウーデルの部屋にある書類は、やっぱり普通じゃない。

思わず、旧き良き時代を偲ぶ懐古主義者や、新しき物を疑う懐疑主義者が、一致団結して、意味もなくウーデルの部屋に書類を集めた様子を目に浮かべてしまう。

まあ、いずれにせよ真実はひとつ。

俺、ヨアヒム・ハウペンは断言しよう。

今のジオン公国にとって、あれ程の書類の束を生み出すことは、もはや意味のない行為であると。

「ハウペン中佐、昇進おめでとう」

そのウーデル中佐は立ち上がり、片方の手で崩れそうな書類を押しさえながら、利き手を差し出した。

「ありがとうございますウーデル大隊長、これからもご指導宜しくお願いします」

「ハウペン中佐、今や君と私は同格だ。ご指導はないだろう。」

だが、助言くらいは何時でも喜んでしよう」

「助かります中佐」

「なーに、大したことではない。」

それにしても数日の休暇を与えたら、昇進して勲章まで貰って帰ってくるとは、ハウペン中佐の身边も慌ただしくて大変だな」

確かに最近の俺は、非常識なぐらいバタバタしている。

正直、西暦から宇宙世紀に精神のみで来た人間は、普通に生きられない気もしてきた。

「ご迷惑をおかけします。

それに、いきなり昇進や受賞が決まってしまったせいか、ご報告が通信のみになってしまい、申し訳ありません」

真面目なウーデル中佐らしい指摘に、俺は苦笑しながら謝った。

「仕方あるまい。公国軍の拡大が始まって以来、緊急人事など日常茶飯事だからな。

寧ろ、ハウペン中佐には同情してしまう」

「恐れ入ります」

急に堅物君のニックネームに合わない笑顔を浮かべたと思ったら、しみじみとし語りだしたウーデル中佐に、俺はどう対応したらいいか分からない。

あいまいな表情を浮かべて立ち尽くす。

すると、ウーデル中佐は「少し待ってくれ」と突然言い出し、テーブル上に積まれた膨大な数の書類を、次々とダンボールに入れ始めた。

一心不乱にダンボール箱4個を満杯にしたウーデル中佐は、一向

に手を休める気配を見せない。

「この書類はハウペン中佐に処理してもらうものだ」

は？、何だと。

その間も、書類は無常にも次々とダンボール箱に入れられていく。

いつの間にか、ウーデルの机にあった書類の半分が消え、どうやら俺の物らしいダンボールに収められた。

「ハウペン中佐が朝一番に寄ってきてくれて助かったよ。

幾ら自分で処理しない書類でも、目に毒だからな」

絶句して二の句を告げない俺に、ウーデル中佐は明らかに嬉しそうな表情で語る。

こいつは真面目だが、やはり気が利かない。

せめて2箱づつ渡せば俺のモチベーションも踏ん張るだろう。

だが一度に10箱分の書類を渡されれば、やる気も失せる。

テンションの下がった俺は、渋々ながら書類達を台車に乗せて、直ぐにウーデルの下を辞した。

あまりの重量に不気味なきしみを立てる台車を、俺が虚ろな表情で自室まで押していく。

そんな俺とすれ違った大隊員が、一様に引きつった表情で敬礼するのも仕方ない。

何とか自分の執務室に、書類を持ち込んだ俺を待っていたのは、

別の書類の山だった。

「何で俺の執務室に、書類が30箱も置いてあるのだ」

俺は台車で運んで来た書類を、見ないようにしながら叫んだ。

だが、誰も答えるものはない。当然か。

仕方なく俺はゆっくりと台車から10箱の書類を下ろした。

うーむ。40箱分の書類はまさに壮観だ。見る者によっては国宝に指定するかもしれない。

そうだ、誰がこのような世界遺産を汚すことなど出来ようか。

俺はゆっくりと部屋の外に出て、扉を閉めた。

確かに目の毒だな。堅物君の言うことは間違っていない。本当に同感だ。

そして、顔面蒼白な俺は閉じた扉に寄りかかり、視線をさまよわせる。

すると良く知った顔が廊下の先から近づいてくる。

ウーデル中佐の副官アテナガン大尉だ。敬礼した彼は何故か俺に恐る恐る声をかけてきた。

「中佐当てる緊急通信です」

「ああ、何だね」

「はい、マ・クベ副司令官より、至急連絡をするようにとのこと  
です」

「ほう、マ・クベ副司令官からか、分かったご苦労」

そして敬礼して去ろうとしたアデナガンに俺は、通信機を貸すよ  
う命令した。

書類に埋もれた部屋の通信機など、とても使う気にならなかった。

訝るアデナガンの執務室から俺はマ・クベに連絡する。

「第12突撃モビルスーツ大隊のハウペン中佐だ。マ・クベ少将  
に繋いでくれ」

突撃機動軍司令部のオペレーターに取り次ぎを頼む。

画面一杯に映るマ・クベの顔は、昨日の意気軒昂なそれと打って  
変わってやつれていた。

あれから、マクベに何があったのだろう。

「おう、ハウペン。遅かったな」

「ご用件は何でしょうかマ・クベ少将閣下」

「ふっ、閣下か……、ふっふっふ。くっくっく」

いや、何か俺の軽いヨイシヨで、急に危ない笑いを上げ始めたぞ。

面食らった俺は、黙って軍医を奴の執務室に送るか真剣に悩む。だが、杞憂に終わり、奴はすぐにまともなことを口にする。

「書類は受け取ったなハウペン」

「こ、こいつがああ書類を送ってきた犯人だったのか、せめて副官ぐらい先に送ってきやがれ。」

そう言えばウーデル中佐に聞き忘れてたことがあった。

せつかくたがらマ・クベに質問をしよう。

「先程、受け取りましたマ・クベ閣下。」

ですが、今まで軍のコンピュータ上でやり取りしていたことを、何故、わざわざ書類などという、時代遅れのアナログな方法に切り替えたのでしょうか」

何故かマ・クベは長いため息をした。

「現在、突撃機動軍を始めとせる部署で氾濫している書類の原因は、ハウペンよ、貴様にあるのだ」

いや、なんで俺の責任になるのだ。

人のせいにするのも大概にせんと、俺だってぶちきれぬぞ。

「おっしやる意味が全く分かりません」

俺の冷たい声がマ・クベの心を揺さぶりにかかる。

「私とハウペンが立案した統合整備計画が、ギレン総帥の手に移

ったのは覚えているな」

「ああ」

ボケが。あれのおかげでお前は少将に、俺は中佐になれたんだろ  
うが

「ギレン総帥か総帥の側近かは知らないが、あの計画を実施する  
にあたり、出来るだけ広い分野で応用しよう」と決めた。

政府機関と軍、民間企業のデータシステムの統一化もそのひとつ  
だ」

「それは、つまりどういう意味でしょうか」

「我々だけでなく、宇宙攻撃軍、親衛隊、参謀本部、一部政府機  
関や企業で書類が溢れているということだよ」

「まさか、冗談だよなマ・クベ」

「……………」

俺の公私の分別ない叫びに、マ・クベは黙って首を振る。

奴の顔色は、やはり何時にも増して不健康そうで、不吉な予感さ  
え俺に沸かせる。

「マ・クベよ、何だか、顔が悪いぞ」

やべ、色を入れ忘れた。

「何、少し片付けねばならない書類が多くてな」

気付いていないからセーフだ。

それにしても、ただでさえ青つちろい顔が、やつれると、より深く青い。

だが、昨日からの労苦で俺も似たようなものだろう。

この取り留めのないワンクッションで、俺は多少落ち着いた。

俺とマ・クベの合作、

いやマ・クベが全面的に主導して、俺がちよこつと手伝った統合整備計画には、書類をジオン公国中に生み出す要素など、微塵もなかった。

今日、俺に言えることはそれだけだ。

明日、山積みの書類を前にして怒り狂っている連中に、情報戦のエキスパートであるタチとその手下共が、『ハウペンがちよこつとだけ手伝った』という噂を流すのは、また別の話だろう。

俺はややぎこちなく、肝心な俺自身の書類と中隊についての話題に戻す。

「話が逸れてしまったな。マ・クベ少将閣下」

再び青い顔に満面の笑顔を浮かべるマ・クベを無視して、俺は話を進めた。

「問題は私の部屋にある書類です。  
これに対応する為、書記と副官を大至急配属して頂きたい」

そう不足どころか。今現在、第12突撃モビルスーツ大隊の総兵力は俺だけ。

悲しいけど、本当にひとりぼっちの大隊なのね。

「無論、分かっている。

安心するが良いハウペン。

送った書類の中には、書記や副官の転属要請書も入っている」

それをあの書類の山から俺一人で探せというのか。

このまま人員を確保出来ず、書類を一人で漁る羽目になったら、俺はゾンビになりかねない。

「了解です。マ・クベいや、副司令官殿。

ランバ・ラルとその部下達は、直ぐに配属して頂けないのですか」

俺はマ・クベの顔を立て、できる限り公私の分別をわきまえつつ、真つ当な要求を伝えた。

奴の青くない左眉は吊り上がる。

「彼らをハウペンの大隊に編入するには、どんなに速くても手続き上、一週間程かかると見ている」

この見通しに俺は怒りを覚えた。

ならばマ・クベよ、お前の権限で、大隊の編成一週間後に遅らせる。

だが、マ・クベは俺の考えにお構いなく、自分の用件を伝えた。

「私の本当の用件もランバ・ラルに関してだ。彼らの待遇を何故か私が処理しなければならん。

そこで、ウラガンに書類を作らせている。

だが、それも直ぐにランバ・ラルの待遇を決めないとデータ入力いや、書類を作れない。

今日中に話し合いに来てくれたまえハウペン中佐」

ヤバい。マ・クベの目もマジだ。

「了解です」

こういう時、階級が下で、可哀想な俺の答えはイエスしかない。すぐにマ・クベは通信を切りやがった。

どうやら奴も書類攻撃でへばっているようで、マブダチの俺にも冷たい。

そもそも転属の書類くらい、突撃機動軍司令部から出しやがれと悪態をつきなながら、俺は思案を巡らす。

仕方なく俺はにつこり笑い、外に待たされているこの部屋の主、アデナガン大尉を呼び入れた。

「アデナガン大尉、頼みがあるのだ。

私の執務室に、公国軍総司令部宛ての転属命令要請書なるものがあるらしいのだ。

出来れば、副官と書記を転属させる書類だけでも、探すのを手伝ってくれないだろうか」

彼は俺の心のこもったお願いに、一瞬迷惑そうな表情を浮かべ、ウーデルの許可が必要だと言いついた。

正論だ。俺はウーデル中佐に泣きついた。

そして今、俺の執務室で、ウーデル中佐直属の部下5人が、虚ろな目で書類をチェックしている。

まあ、俺の目もそうだ。

とにかく、副官と参謀と書記の三人分の転属要請書が見つかるまで、我が大隊の兵力は臨時の援軍5人を含めて6人体制に大増強されたのだった。

## 第12話、天敵

ウーデル中佐から借りた連中は、事務のプロだった。書類は手際よく処理されていく。

それでも第2中隊長執務室に積まれた書類はなかなか減らない。

その苛立ちを抑えながら、俺も細々と書類を処理していたが、直ぐに飽きた。

問題もある。その遅い処理速度だ。

俺がどう頑張ってもアデナガン大尉の三分の一にしかならないよ  
うだ。

だが、とっておきの秘策があった。

かのシャア・アズナブルは、量産型ザクより30パーセント増しの専用ザクを駆り、連邦軍に通常型の3倍の速度と錯覚させた。

俺は書類の処理速度を通常の3倍と、アデナガン大尉等に錯覚させてみよう。

どうせ書類の山だ。やった振りして山に戻せばわからないだろう。

だが今、俺は5対の剣呑な白い目を向けられている。

暇つぶしを兼ねたその作戦は僅か数分で崩壊したのだ。

普通に考えれば、処理した方の書類の山を見れば露見するだろう。

俺は自分のアホさに腹をたて、シヤアに対する勝手な敗北感に襲われた。

それでも今更引く気などない、意地で俺は作戦を続行しようとする。

「私には分かっているのですハウペン中佐殿。全力で書類の処理をして頂きたい」

やっと突っ込みがきた。

応援組のボス、アデナガン大尉が、それはそれは冷たい声で俺に意見する。

ちょっとしたお茶目な暇つぶしと思えば、腹も立たないだろうに。

だがアデナガン大尉の性格は堅く、この件を笑って許すほど大人ではなかった。

「ハウペン中佐殿は、私の前の机で書類をやって頂きます」

「すまない大尉」

俺は2階級も低い男にペコペコしながら謝り、素直に席を移動する。

『今度、お茶にしぼりたてのぞうきん汁を入れてやるか』

ともあれ、何かのはずみで後世の歴史書にこのシーンが記述されたなら、大人なハウペンの寛大な態度で、確かにこの場は収まったと記されるだろう。

俺の平穩無事な時間はあまり長く続かない。

何故ならマ・クベから一本の通信が入り、再びアデナガン大尉と俺は一触即発の緊張状態になる。

マ・クベは出頭命令を出した。

いそいそと外出準備をしていると、生真面目なアデナガン大尉が、  
またも剣呑な表情を隠そうとせず、俺に突っかかってきた。

「この命令には時間の都合がつき次第とあり、明らかに緊急命令と一線を画していると小官なら判断しますが？」

「そうだな。」

それでも上官の命令には、すぐ従うものではないか」

理をもってなだめる俺の声に、嬉しさが入ってないと言ったら嘘になる。

緊急性は別にしても、マ・クベ、いやマ・クベ様の召集命令は隠しようのない事実なのだ。

誓って言うが、裏で手を回した覚えもないのさ。

だが、俺の笑っている目で信じてくれと訴えても、やはりアデナガン大尉には通じない。

彼は剣呑な表情をさらにきつくして、俺の緩みきった顔を見つめている。

済まないなアデナガン大尉。

俺は書類から離れられると思うと、嬉しさで筋肉の痙攣が止まらないのだ。クッククク……。

いかん、愉悦に浸っている間にアデナガンの顔が最終形態になっている。

正直言うと、ちょっと怖い。

よく考えてみればアデナガン大尉はやっぱりウーデルの部下であり、俺の部下ではない強みもあった。

俺の部下なら鉄拳矯正で済む話も、現実にはアデナガンの度量はちっちゃいと、心の中で毒づくしかない。

たかだが小1時間、いや小3時間ぐらい、気持ちよく送り出すことが、階級社会の下位の務めだろうに。

「しかし、この責任者であるハウペン中佐が、持ち場を離れること自体、如何なものかと小官なりに愚考致します」  
何て言うかしぶとい奴なんだ、アデナガン大尉は。

その愚考とやらを粉碎しようと、息を吸い込むと、アデナガンと同様に疲れた顔をした四人の応援組が手を休め、ムツツリとアデナガンの後ろに立った。

ま、まさか……？。いや、あまりに書類が多いからと言って、反乱なんて起こさないはず。

でも暴動になったら、まさか俺の管理責任になるのか。

「ふっ、どうやらお互い疲れて、正常な判断ができないようだな」  
ささやかな妥協を、彼らは理解できずに、困惑の表情を浮かべて黙った。

「皆で昼飯を食べに行こう。奢るから付き合いたまえ」

彼らは、鳩に豆鉄砲な感じでただ頷いた。

俺は5人をムンゾでも指折りの日本食レストランへと案内する。

押し売り情報部門は臨時収入をほとんど持っていったが、ザビ家の私財から出た報酬金は残った。

それを嫌々活用して、俺は彼らを買収という名の接待に招待したのである。

だが、遠慮を知らないウーデルの部下達には、高級店なんか勿体ないと、俺はすぐに後悔した。

「かつぱ巻き、アワビ、大トロ、カニ、キャビア、イワシ」

俺はまた、かつぱ巻きを注文した。腹の中はかつぱ巻きとイワシばかりだ。

それでもカウンターに並んだ5人は、俺が牽制でかつぱ巻きを注文しても、あっさり無視して高級なネタを連打で頼む輩だった。

いや、イワシを頼んだアデナガン大尉は別だ。

彼はやはり遠慮を知る男といえよう。

皆にイワシを勧めようと画策する俺にだって、プライドはある。

かっぱ巻きとイワシだけを喰えとは、流石に大声で言える訳がない。

諦めた俺は何気なくイワシの値段を確認した。

『……………』

二の句を継げない。

イワシがアワビや大トロより高い世界がまさか現実になっているとは…………。

いや、ムンゾで一番と言われた店だって、ぼったくりをする可能性はある。

その0.1%ぐらいはな。

慌てて、俺はさっき頼んだアジの値段を調べようと、お品書きを見る。

すぐにカウンターへ、お品書きを落とした。

こいつも馬鹿高かった。

ここは詐欺店だ。急にお腹一杯になった俺は悟った。

いや、それ以前に安いと思って何貫も食べたイワシが、図らずも皆に高い寿司を食えと煽っていたのだ。

俺はさっき褒め称えたアデナガン大尉の悪口をさっと毒づきながら、この世界の常識を呪った。

そして、何とかランチを終え、手を震わして高額の会計を払う。

逆にアデナガン大尉一党は、びっくりするくらい上機嫌になり、俺を書類整理から放免した。

いや正確に言えば。「ハウペン中佐がいなくても影響ありません」  
とのたまったのだ。

だから俺はきちんと行ってやった。

「ありがとう。後は任せた」

奴らを書類整理へと見送り、俺はマクベの所に向かう。

ただ、本当にあつという間にこの用件は終わってしまった。

そこで俺は接待した彼等の言葉を思いだす。

せつかく邪魔と言ってくれたのだ、直ぐに帰るのも失礼だろう。

そう思った俺は、この世界へ来てからずっと興味を持ち、避けてきたものへと向かって歩み始めた。

やがて、やってきたのはウーデル大隊の巨大な格納庫だ。

そう。整備台に収められたモビルスーツが並ぶあの場所だ。

初めて生のモビルスーツを見た俺は、度肝を抜かれた。

「でかい」

モビルスーツを見上げながら、そう呟いた俺はその威容に圧倒されそのまま押し黙った……。

言うまでもなく人類史上初の量産型モビルスーツは、ジオニックス社のMS05ザクである。

そして、そのコンセプトを受け継ぎ、より強化された最新鋭機体が、俺の目の前に鎮座するMS06ザク2となる。

その洗練されたフォルムは美しい緑色に化粧され、ジオニックス社技術陣の強い愛と友情を感じる。

それだけではない、力強い筋肉美ならぬ金属美の体格は、兵器として頼もしい。

消灯中のモノアイは、まあ……その、なんだ。とにかく最新鋭モノアイだろう。

それ等の要素が詰まった現在最強のモビルスーツがザク2であり、まさに戦う芸術品といえよう。

そして何よりハウペンの愛機、いや俺の愛機である06Cは、そんなじよそこらの頭ハゲたザクとは違うのだ。

そう俺の愛機の頭部には、同じザクでも立派な角がある。

この通信性能を向上させる角は、俺の愛機に王者の風格さえ与え

た。

別にスキンヘッドが悪いといっているわけではない。ノーマルタイプの06Cだっていい機体ではある。

ただ坊主頭と角つきをこつして並べて見ると、凛々しさが全く違う。

一人悦に入り、ひいき目で愛機を見ながら、大事なことに気づいた。

『角つきは、敵から真っ先に狙われないか？』

いくら格好良く美しくても、ザクはまず戦場に出る戦闘兵器だ。

隊長機が目立ち、真っ先に狙われるなんて許せない。

俺は自分の為に、ハウペン大隊から坊主頭のザクを締め出すことを心に誓った。

直ぐに携帯端末を取り出し入力する。

『大隊の全ザクの頭部にカツライヤ、ダミーを用意する』

全ザクにダミー用の角を設置すれば、問題は解決するだろう。

さすがの俺も、ノーマルタイプ全機を隊長機仕様にするよう気はない。

単にイメチェンするだけなら、コストも安く現実的な案になるは

ずだ。

そして、整備台の簡易エレベーターに乗った俺は、今日初めて会った愛機06Cザク2量産型、角付きタイプのコックピットへと、興奮しながら侵入したのだった。

### 第13話、

ビルみたいな巨体を誇るモバイルスーツは、戦闘性能の向上を最優先としている兵器である。

それでも愛機06Cの操縦席は意外とゆったりしていた。

宇宙世紀の最先端技術を集めたザクは、人間工学による快適さも考えられているようだ。

いつそその精神を拡大し、コックピットにシャワールームを増設するよう、参謀本部に提案してみるか……。

もちろん大真面目な提案だ。

別に公国中に溢れる書類テロを、俺とマ・クベのせいにした某参謀本部への嫌がらせでは決してない。

そう、あれだ。地球連邦との緊張が高まってる今、モバイルスーツにシャワールームを増設することは兵の士気に関わる最重要問題といえる。

うん名案だ。デジタルネットワークが復旧する前に、頑張ってる奴ら宛ての書類を出しまくるしかない。

……まあ、この名案も大事だが、今は何よりもモバイルスーツの操縦だ。

とりあえず扉を開け、コックピットに入り、操縦席に座ってみた。

操縦席から見える風景はコロニーの地下にある整備基地の壁に過ぎない。

それでも俺は『これがモバイルスーツの操縦席か』と不覚にも感慨深げに呟いてしまった。

早速操縦方法を学ぶ為、備え付けの電子マニュアルを手にとって起動させる。

すると画面は明るくなり、びっしりと文字で埋め尽くされていた。

本当に半端ないデータ量だ……。

まるで俺の決意を嘲笑うかのように、マニュアルはザクに関する小難しい説明を並べたてている。

俺はテンションを徐々に下げつつ、めげずに読み進めた。

だが、頼りにしたハウペンの記憶があまり役立たない。

彼のモバイルスーツの操縦理論は、どちらかというと体育会系だ。

近代兵器の扱いを体だけで覚えるんじゃないかと毒づきながら、俺はラスボスクラスの電子マニュアルに挑んだ。

まあ結局、無いよりは増しというハウペンの記憶を頼りにするしかない……。

だが、しばらくして完全に煮詰まってしまった。

しょせんマニュアルなんて、俺がニュータイプになったら一瞬で理解できる存在。

このちよつとした都市伝説みたいな空想は、俺の勉強意欲を破壊した。

俺はお勉強による操縦法のマスターを諦め、操縦マニュアルをそつと元に戻した。

やはり誰もが理解できる簡単なマニュアルは重要だ。

早期の改訂を検討させねばならないようだ。

だがそれは未来の話であり、さしあたって俺はマニュアルなしでモバイルスーツを動かすしかない。

今度はぶつつけ本番で体育会系方式でザクを動かしてみることにする。

まずモバイルスーツの起動。

これは手順通りやれば良く、簡単に成功した。

次に機体を整備台から動かすのだが、ザクは簡単な動作なら自動操縦をできる。

しかし、自動操縦に何の意味があるのか？ 勿論俺は、手動操作でザクを動かす積もりだ。

俺は初心者ならでは緊張感にさいなまれながら操縦桿を握った。

額には大汗を浮かべ、フットペダルにかけた足は何故か痙攣してくる。

操縦桿を握り締めたまま硬直した体は、時間の経過と共に集中力を奪われていった。

何度も深呼吸をして、心拍数を落ち着かせようと試みたがその効果はやはり限定的のようだ。

このままでは埒があかないと気持ちばかりが焦り、追い詰められた俺は操縦を諦めるか一瞬悩んだ。

無論、答えはYESだ。

こんな所で事故死するわけにいかない。

大隊長の仕事は後方でふんぞり返って指揮することだ。

だからモビルスーツの操縦なんて二の次だ。

そう自らを納得させた俺は、愛機を一步も動かさないまま操縦席を後にした。

だが、改めて地上から見る愛機の勇姿は、俺の心を揺さぶった。

格納庫の出入口へと歩むうちに、俺は新たな決意を胸に抱く。

そして愛機へと振り返り拳をあげて小さく呟いた。

「アイ、シャル、リターン」

このくさい言葉とともに、俺のモビルスーツパイロットへの道は新たな段階に進むことになる。

また同時に別の野望も芽生えた。

どうせモビルスーツのパイロットになるなら、エースになって異名を貰いたいというのが、男のロマンだろう。

確かに前途多難な野望だ。

だがせっかくの宇宙世紀で、例えば味方から緑の宇宙ゴミ・ハウペンとか、緑の落伍者ハウペンなんて味方から言われたくない。

俺は書類と格闘しているアデナガンが待つ執務室を見向きもせず、モビルスーツの簡単な操縦法探し求めた。

ただ自動車の運転とは違い、機密決戦兵器モビルスーツの操縦方がそこらへんにゴロゴロと転がっているわけではない。

この軍事機密の壁は厚く、万策つきたかに見えた。

だが、俺には忘れてはいけけない優秀な部下達が存在した。

タチ少尉に急いで機密通信をかける。

「ご用件は何でしょうか中佐。」

私はあなたの命令に従って、マ・クベの腰巾着に付きまわっていて、非常に非常に忙しいのですよ」

変装したタチ少尉が通信画面に映ると、物凄い見幕で上官でありスポンサーでもある俺にまくし立てた。

よく分からないが、何かタチ少尉はご機嫌斜めらしい。

「少しでいいから時間をとれないか」

それをあつさりスルーして俺はタチに頼む。

タチ少尉はあからさまに舌打ちしやがった。

そんなにウラガンの日常に密着していたいのか？

「尾行対象は今からトイレに行くんですよ。

最も油断した時が彼の心情を入手するチャンスですからね」

トイレ？、トイレなんか見張ってんのか？

いやいけない。一般人が決して想像してはいけない裏の世界だ。

「ウラガンの監視は重要だが、私の用件も重要だ」

何か通信機からタチ少尉の唸り声が聞こえる。

タチ少尉はそんなにトイレを見張りたいのか？

「タチ少尉。私は単にラルどの部下である、アコース曹長の連

絡先を内密に知りたいただけだ」

「内密？」

ラル様にも内密と言うことですか」

「ああ出来ればそうして貰いたい。」

勿論、ラル殿に迷惑をかける話でない。必要なら誓う」

「……分かりました。」

直ぐにお送りしますが、彼は今休暇中ですよ」

「その方が私には好都合だ」

アコースの連絡先をゲットした俺は、軍用機密通信を使って早速連絡を試みた。

「はい、アコース曹長であります」

直ぐに緊張した声が出た。軍用機密通信を休暇中に喰らえば誰でもそうなる。

心を落ちつかせてやるう。

「君の留置場仲間のハウペンだ」

「……………」

返事がしない。どうやら外したようだ。

仕方ない。一からやり直そう。

「アコース曹長、こちらは第12突撃MS大隊の指揮官ハウペン中佐だ」

「はっ。こちらはアコース曹長であります」

アコースは再び緊張した声を出した。

「留置場以来か、元気そうだな」

「はっ、その節は警察に口を利いて頂き本当に助かりました」

その口ぶりから本当に感謝しているようで、大いに脈ありだ。

「気にするな。実をいうとちょっとした個人的な頼みがあって連絡した」

「頼みですか」

「そうだ。内密に会って頼みたい。

軍標準時1700に私のオフィスにこれないかね」

「はっ、お世話になったハウペン少佐、いえ中佐の為です。否とは言いません」

「そうかでは悪いがオフィスで待っている。

ああ、それからラルどには知られないようにな」

「はい、了解いたしました。

そのハウペン中佐」

「何だ？」

「中佐のオフィスの場所はどこでしょうか？」

アコース曹長との打ち合わせは上手くいった。

彼ならば……

そういえば書類担当のアデナガン大尉を忘れていた。

俺は慌てて執務室へと駆け戻った。

臨時大隊本部の前にたどり着いた俺は、息を整えゆっくりと扉を開けた。

執務室は深い暗黒の世界に包まれている。

とりあえず照明のスイッチを押すか。

すぐに部屋は明るくなり、うずたかき書類の山を映し出した。

奴らは何処へ行ったんだ？

当選の疑問だが答えは返ってこない。

まずはアデナガン大尉に会うしかないようだ。

所在は彼の執務室だろう。

俺は再び、アデナガン大尉の小さな職場に向かった。

ノックもせずに乱入した俺に、嫌な顔をひとつ見せず迎えた彼は、椅子から素早く立ち上がり敬礼をした。

そして俺の答礼を待って、いつもの陰気な声で質問した。

「これはハウペン中佐、マ・クベ少将の用件は終わったのですか」

「ああ、大したことはなかった」

とはいえ、なんとなく後ろめたい俺は声にたいへんだった感を感じます。

「そうですか。実はあれから、ハウペン中佐の副官に関する書類が見つかりました」

アデナガン大尉はゆっくりと書類を差し出した。

「そうか。ご苦労だった大尉」

舞い上がる気持ちで俺は書類を受け取った。

そりゃ嬉しいに決まっている。

公国軍のモビルスーツ大隊の人員が、大隊長だけしかないなんて、当人である俺だって未だに信じられない現実だ。

早速要請書にサインして公国軍総司令部に出さねば。

一般機密書類で公国軍総司令部人事局長殿宛てのようだ。

内容は……突撃機動軍司令部が第12突撃MS大隊副官に、第8突撃MS大隊副官アデナガン大尉を当てると決定したこと。速やかな転任手続きを頼むよって書いてあるな。

「ご丁寧にも突撃機動軍副司令官マ・クベ少将閣下の署名まである……。」

「どこから突っ込んだらいいやら、まず俺のサインを書く場所がない。」

「そりゃあそうだマ・クベの署名付き書類だからな。」

「本来はこの書類ではなく、副官が来ているべきなのだろう。」

「本当にひどい奴だなマ・クベは。」

「それに、まさかアデナガン大尉って目の前にいる生真面目君のことか。」

「俺とこいつの相性は最悪なんだよね！」

「読んだかね？」

「はい、拝見しました」

「彼も嬉しくはないだろう。」

「ウーデル中佐とは相性も良かったようだしな。」

「だがここは軍隊、個人の感情は後回しだ。」

「そうか。第12突撃MS大隊へようこそ大尉」

そう言って俺はアデナガンと握手した。

こうして第12突撃モビルスーツ大隊は2名に増強されたのだっ  
た。

『完』

ただアデナガン大尉と水と油な俺でも、彼の優秀な事務処理能力  
を認めない訳にはいかない。

彼と四人の勇者達は他にも多くの重要な書類を発掘していた。

例えばこれだ。我がハウペン大隊に配備されるモビルスーツが、  
当面5機しかないというマ・クベからの通知だ。

あいつとは一回、どこかでじっくり話し合う必要があるようだ。

## 第14話、教官

「聖バレンタインを敬う今日、愛想のかけらもないアデナガン大尉が我が副官となった。」

このまま彼と、大隊について意見交換をしたいところだが……。

アコースとの約束の時間が迫っていた為、短い打ち合わせで済ませ、自室に戻った。

俺はまず椅子に座り込み、疲れを吹き飛ばすように大きく一息ついた。

そういえば、アデナガン大尉に明日の予定を伝え忘れていたな。

慌てて机上の通信端末に手を伸ばした。

その時、端末の隣に置かれた花柄の包みが俺の視界に入る。

恐る恐る中身を確認してみるとバレンタインチョコだった。

俺の心は一瞬にして舞い上がる。

だが、チョコを抱えている内に、大問題に気づいた。

そう、チョコが誰から誰宛てかという疑問だ。

特にかつてのハウペン宛てか、或いは現在の俺あてなのかは気になって仕方ない。

その悩みは来客のブザーがなるまで続いた。

いつの間に面会の時間になっていたようだ。

俺は精一杯愛想よく彼等を迎え入れた。

「よく来てくれたアコース曹長、それから……」

どういつ訳か、直立不動で立つアコースの隣りには、仁王が立っている。

「クランプ少尉であります。ハウペン中佐」

厳しい表情の仁王は、自らの名前を申告した。

そう、彼はラルの右腕として一握りの人々から評価されているクランプに間違いない。

さらに言えば俺は彼の名前を知っているだけでなく、数日前に会ったばかりでもある。

「確かカフェで会ったな、クランプ少尉」

「はっ！ その節は我々に夢を与えて頂き感謝の言葉もありません」

「気にするなクランプ少尉。ラル殿は私にとっても大事なお方だ」

「ありがとうございます……」。

ですがその中佐のご好意を忘れ、アコース曹長が酒でご迷惑をかけるとは、慚愧に耐えません」

「ん……、何の事だ？」

「このアコースの大失態ですが……、彼の上司であり、中佐をお送りするよう命令した私にも、監督責任があります」

「なるほど……」

アコースとクランプは何か勘違いしているようだ。どう説明するべきだろうか？

「申し訳ありません中佐。」

あの日は酒に酔っていて、無礼を働く気などなかったのです」

アコースはそう言って、クランプと共に深々と頭を下げた。

どうやら酒に酔って暴れたから呼び出しを受けたと思っているようだ。

もちろん、俺だってそんな事でいちいち呼び出すほど暇じゃない。

それに秘密厳守とは言わなかったとはいえ、仁王いやクランプなんか連れてきやがって……。

舌打ちをなんとか抑えたが、もう少しだけ彼らの頭を下げさせておきたくなってくる。

だが、招かざる客のクランプはともかく、我が師匠になるアコースに、いつまでも頭を下げさせておくわけにはいかなかった。

「二人ともすぐに頭を上げてくれ。命令だ」

彼らは命令という言葉にさっと反応した。

俺はなるべく穏やかな口調で事情を説明した。

「アコース曹長は何か勘違いしているようだ。」

君を留置場から出したのは他ならぬ私ではなかったかな」

「はっ、その節はお世話になりました」

アコースは再び頭を下げた。

「頭を上げたまえアコース曹長。」

私があの日のことを怒っていたなら、君は留置場で何日も生活しただろう」

「では、何故アコース曹長に出頭を命令したのでしょうか」

意気込んで尋ねたクランプに対して、騒動の張本人は何かに気づき顔面蒼白になっていく。

「まあ、落ち着きたまえ少尉！

私の言い方が悪かったのかもしれないが……

私はアコースに個人的な頼み事をしたかっただけだ」

「頼み事ですと？  
アコース？」

クランプはアコーの表情の異変に気づいたようだ。

「そのクランプ少尉。  
ハウペン中佐は何か頼みがあるというようなことを言っていたよ  
うな……」

直立したまま弱い声でアコースが返答した瞬間、雷鳴のような怒  
声が部屋に響いた。

「ば、馬つ鹿もん！」

彼の怒鳴り声で書類のタワーが一つ崩れた。

その間に俺は5センチほど体をのけぞらせ、椅子から落ちそうに  
なる体のバランスを必死にとった。

一番驚いたのは、間違いなく俺だ。

「申し訳ありません中佐。」

「このような失態は二度とおかしません」

再び二人が頭を下げた。

「気にするな。」

「私の言葉が悪かったのだ」

「お心遣いありがとうございます」

「ではアコースと話をしてもよいかな」

俺は早く帰れという意志を込めてクランプに聞く。

「中佐、この失態のお詫びに何か私にも手伝わせては頂けないでしょうか」

謝ると同時にクランプは親切の押し売りを始めた。

正直言つと俺は怒鳴られても伸びないタイプ。

顔が仁王で性格がきつと鬼軍曹みたいな方には、さっさとお引き取り願いたいのである。

だが私事と言った手前、クランプだけを帰す言葉がなかなかみつからない。

「落ち着いてくれクランプ少尉」

「そのハウペン中佐。そもそも頼み事とは何でしょうか」

クランプを宥める俺の耳に、心配そうなアコースの声が響いた。

俺は一瞬言い淀むも、仕方なくクランプの前で事情を説明するこ  
とにした。

「まず、これから話す内容を秘密にすると誓って貰いたい」

アコースとクランプはやけにあっさりと言黙を誓う。

「君らは、私が事故にあったことを知っているか」

「はい、もちろんです」

「実は……その事故の後遺症でモビルスーツの操縦方法がわからなくなった」

「えっ」

俺のカミングアウトにアコースが驚きの声を上げる。

そのかたわらに立つクランプは、ひとつ頷くと思慮深い質問をしてきた。

「中佐の操縦技術はどの程度失わたのでしょうか」

「……完全に失われたと言ってもよいぐらいだ」

「なるほど……」。

ところでこのことを軍病院や上級司令部は知っているのでしょうか？

クランプの事務的な質問にアコースがハツとした様子で、俺を見つめた。

「それは君等に関係ないことだ」

俺の即答に込められた意味を、クランプは正確に察知したようだ。

「分かりました。我々は何も聞かず、中佐を一人前のパイロットに育ててみせましょう」

そういうクランプの眼差しは、新兵を値踏みする鬼教官のようだった……。

いや、待てクランプよ、まだ誰もお前にそんなことは頼んでないと思うぞ……。

だが、やる気満々のクランプにそれを伝える勇気が俺にあるはずもない。

「お手柔らかに頼むよ少尉」

げんなりしながらも全てを受け入れた俺は、やっぱりノーと言えない男だった。

「お任せ下さいハウペン中佐。」

ところで操縦訓練をするにあたり、幾つかの問題があります」

「何かな少尉」

「はい、まずパイロット候補生となったハウペン中佐には、操縦用シミュレーションの使用が不可欠です。」

これには士官学校の操縦シミュレーションを使うしかありませんが、残念なことに使用者の記録や成績を記録しています」

「なるほど、何とか士官学校に紛れ込まないといけないようだな」  
俺はやれやれと思い肩をすくめた。エースパイロットへの道は果てしないようだ。

「実は私の部下に数人ほど、士官学校のシミュレーションで再訓練を受けさせたい者達があります。」

何とか中佐の方から士官学校に手を回しては頂けないでしょうか」  
クランプは獰猛な顔でニヤリと笑い、俺の表情を引きつらせた。

「わかった。すぐに手配しよう」

「それから隔離された訓練場所も確保する必要があります」

「小惑星の秘密訓練施設は日程的に難しいぞ……」

「ご安心下さい中佐。」

クベ少将がズームシティの地下エリアに、秘密訓練基地を建造中です。」

一部施設は稼働しつつあり、中佐の訓練場所になると小官は愚考いたします」

うつ……。 雰囲気は鬼教官でも、クランプはやっぱり知的で頼りはなる奴だ。

俺も秘密訓練基地の存在をタチからの報告書で知ってはいた。

だが、こんな利用法は思いつかない。

「マ・クベ少将からすぐに使用許可を取ろう」

俺はそう言ってから二人にあらためて頭を下げた。

「グランブ少尉、アコース曹長。これからよろしく頼む」

俺は有意義な話合いを締めくくる。

こうして宇宙世紀0078、2月14日は無事過ぎ去った。

尚、この時我が手にあったチョコが誰からのものであったかは、未だに不明だ。

## 第15話、己の心

2月15日、午前5時。

玄関を開けた俺は、礼儀正しく佇む夕子少尉と顔を合わせた。

「おはようございますハウペン中佐」

「おはよう」

すぐに夕子を部屋の中へ誘い、俺は熱いコーヒーを渡した。

「ありがとうございます」

彼はソファーにゆったりと座り、コーヒーを一口すすると、落ち着いた声で切り出した。

「まず軍内の一般的な動きについては、ここにまとめてあります」

夕子はデータパッドを差し出す。

それを受け取った俺は、さっと目を通す。

多岐に渡る分野を非常にきめ細かく分析してあった。

それも軍だけではなく政府に関わる情報まで入っているのだ。

「このような形で機密を残しても大丈夫なのかね」

「無論です。あくまでもこれは一般的な情報をもとにした分析ですよ」

……ならば安心だな。それに、今の俺には重要な懸案があった。

「ところでウラガンの件はどうなったかね」

「彼の病歴などを調べ終えました」

さらに、タチは申し訳なさそうに続けた。

「しかし、特別に異常な言動などは確認できませんでした」

「成果なしか……」。

いや、良くやってくれたタチ少尉」

「恐縮です。それから今後の調査はどうしますか？」

「続けてくれ」

タチは俺の即答を相変わらずの無表情で受け止めた。

「了解です。」

ただウラガン大尉に関する調査は非常に難航しています」

「苦労は分かっているつもりだ」

「……中佐。その最大の理由が曖昧な調査目的にあると言わざる負えません」

「……」

「我々は中佐ご自身の依頼を遂行する為に情報を必要としています」

俺の悲痛な表情の黙まりに、夕子は容赦なく正論で切り込んできた。

しかし、ウラガンの疑惑は統合整備計画という名前を知っていた……可能性があるだけだ。

それだけで俺と同じ世界の出身かもしれないなんて、口が裂けても言えない。

「ウラガン大尉の失態により、彼への僅かな違和感を感じた。

単なる私の思い違いならよい。だが彼はマ・クベの副官である以上、見過ごせない」

「中佐の感じた違和感とはなんでしょうか」

「ウラガンの言葉だ。彼の経歴では知るはずのない言葉を使っていた」

「なるほど……。その単語とは？」

「言えるはずがない。」

「残念ながら軍事機密に抵触する言葉だ」

夕チ少尉はこの調査理由に内心不満だろう。

だが、少なくとも調査の方向は明らかになったはずだ。

「そういうことでしたら……、」

我々はウラガン大尉を地球連邦のスパイと仮定して、調査を継続しましょう」

夕チ少尉の目が妖しく光ったように思える。

……不安だ。俺は夕チに軽い疑惑の目を向けた。

「彼を連邦のスパイと疑っているわけではないぞ」

厳しい声でウラガンを弁護し、念を押す。

「分かっています。

ですがそう仮定することで調査がより効率的になります」

「ほう？」

「現在、我々は、彼がホツとした時に漏らす一言や寝言などを丹念に調べています。」

その中にもし経歴と合わない地球独特な表現が有れば、調査は大きく前進すると考えています」

地球独特の表現ね……

「まあ、少なくとも突破口にはなりそうだな」

「はい、それにジオン訛りのスラングしか確認出来ないにしても、次のアプローチ方法を選択する助けにはなるでしょう」

「見事だな。やはりこういうことは専門家に任すに限る」

俺は彼への信任を強めた。

流石は夕チ少尉だ。

もちろん俺は、変な趣味でウラガンをつけ回していないと信じていた。

夕チは相変わらずの無愛想な表情で頷いただけだ。

「ところで中佐。調査の拡大には追加人員を必要とします」

夕チの眼が険しくなった。

人の部屋に勝手に入った罪は、この辺で許してやるか。

それに僅かな時間で成果をあげた部下には飴も必要だ。

「予算を活用して調査をしてくれ。配置は一任する」

これで夕チは、ウラガンを部下に監視させるだろう。

「有難うございます中佐。

他に何か質問はありますか」

「いや、特にない」

タチは敬礼し、立ち去ろうとした。

「その紋章は……」

だがタチは立ち止まり、昨日のチヨコの包みにかかれた絵を見つめた。

それは中央に十字の月桂樹を置き、二匹の鶴を左右にしているものだ。

「知っているのか」

「確かクラベナ家の家紋かと」

クラベナ家ということは……

エリナ・クラベナ中尉か。

彼女は第7突撃MS大隊第2中隊の小隊長で、おそらく第12突撃MS大隊に移籍して来るであろう人物だ。

タチが爆弾を残して立ち去ると、俺は彼女のことを考えた。

だが、誰宛てかなんてわかるわけではない。

それにたかがチヨコひとつ、それも義理の可能性があるので、こたわる自分自身が不思議に思えてきた。

ここに来てから俺は人付き合いに慎重だ。

未だに接触を避けているハウペンの家族がそのいい例だろう。

いつしか俺は公が忙しいことを言い訳に、人との温もりに縁遠く  
なっていたようだ。

そのせいで、プライベートな交流に飢えているのだろうか。

頭の中が目まぐるしく回転する間に、いつしか出かける時間にな  
っていた。

俺は急いで身だしなみを整えると、寮の地下駐車場へ向かった。

ここにハウペンの愛車、アナハイム・エレクトロニクス社製の中型  
乗用車クラッセンが停めてある。

これを運転して俺は大隊本部に向かった。

車内で俺はジオン公国軍のムサイ級巡洋艦に思いを馳せた。

地球に住む連邦の住民にはあまり興味など持たないだろうが、同  
級はジオン公国軍の主力戦闘艦である。

俺に下賜された建造中のヴィルベルウィンドも、ムサイ級の一隻  
だ。

今日、俺はヴィルベルウィンドの視察に造船所を訪れる予定だ。

以前から楽しみにしていた計画だが、残念ながら親愛なる我が副

官アデナガンに、このことを伝えて忘れた。

そこで彼に雑務を委託する為、まだ夜間当直の者達しかいない大隊本部へと姿を見せたのである。

自室を素通りした俺はアデナガン大尉の執務室に入る。

そして、彼宛ての命令書をそつと置いた。

その命令書は簡潔ながら、俺のアデナガン大尉への信頼感がにじむように腐心したつもりだ。

『緊急の仕事が出来た。アデナガン大尉には大隊本部の臨時指揮官に任命する』

有能な彼にはこれで十分に意図が通じるだろう。

俺はすぐに頭の中からアデナガンを締め出して、大隊本部を後にした。

ジオン最大級の造船所であるズムシティ中央造船所は、コロニーの支点である軍港に隣接している。

造船所と軍港の間には、新造艦や補修を受ける艦艇の移動をできるように、巨大な通路が設けられていた。

そして、その通路に直結する幾つかの無機質で巨大な箱型の空間こそが、艦艇を建造するドックである。

造船所に着いた俺はまず管理本部に向かった。

ここではあらかじめ連絡さえしていれば、造船所を案内してくれる技術士官を付けて貰える。

やってきたのはまだ若い技術大尉だ。

彼の案内で向かったドックは、重力こそ弱くなっているが空気は充填されていて、ノーマルスーツを着用する必要はない。

ここでは早朝にも関わらず多数の工員が忙しそうに行き交っている。

それに工廠独特の機械油の匂いが充満している。

更に視線を伸ばした俺は、建造中のムサイを数隻確認した。

特に船体を紫に塗装されつつあるムサイは目を引く。

おそらくあれはキシリア閣下の専用艦だろう。

案内してくれる造船所の若い技官は、その視線に気づいたのか、先端が紫色に塗装された、可哀想なムサイの前まで俺を連れてきた。

「この艦こそ、ハウペン中佐のヴィルベルウィンドです」

技術士官は厳かに告げ、うやうやしく敬礼した。

「ふっ」

思わず俺は苦笑をもらした。造船所のジョークは本当につまらない。

「この艦はキシリア閣下の専用艦だろう」

俺がどうだと言わんばかりに宣告すると、彼は驚いた表情を浮かべた。

「いえ、あの、ハウペン中佐。

キシリア閣下の専用艦は別に作られています。

このヴィルベルウィンドこそ、間違いなく中佐に下賜された艦です」

彼は手を紫ムサイにかかけ、先程と同じ言葉を繰り返した。

これがヴィルベル……。

つむじ風という名にまずそぐわない化粧だ。

「何故、紫色に塗装をしているのだろうか……」

ショックを受けながら、どうにか俺は疑問を口にした。

「はあ、造船所の所長命令ですが」

技官は肩をすくめた。

いや、俺はあんな目立つムサイに乗りたくないぞ。

緑色のムサイばかりいる戦場に紫色のムサイがいたら、真っ先に狙われことなど子供でもわかることだ。

「大尉。所長に話を聞きたいが可能かね？」

思わず目の前の技術士官に俺は詰め寄った。

俺の様子に驚いたのか、彼は大慌てで頷き「所長に聞いてきます」と言い残し去った。

そして間もなく、年をとった太鼓腹の人の良さそうな所長を連れて戻ってきたのである。

「何事かねハウペン中佐」

やってきたのはこの工廠を預かるハルマという名の技術大佐だ。

どうやら俺は上官を呼びつけてしまったようだ。

「大佐、ご足労をお掛けして申し訳ありません」

「構わんよ。ハウペン中佐とは私も一度、ゆっくりと話合いたいと思っていた」

「ありがとうございます大佐。そう言って頂くと私も助かります」

人柄の良さそうなハルマ大佐に俺は素直に感謝した。

「よしまずは要件を聞こう」

「はい……、我が艦がパープル色に塗られている理由をお聞きかせ願いたい」

「パープル？中佐の艦はパープルではないはずだが」

彼は笑顔で否定し、明らかに紫の塗装を塗られつつある我が艦ヴイルベルウインドを指し示した。

「これはマゼンタ色という。美しい色だろう」

どうやらこの色はハルマ技術大佐のお気に入りようだ。

彼の話によると、マゼンタはパープルやヴァイオレットと同様に紫色の一種だそうだ。

だが俺や一般人にはみんな紫色で通用するに違いない。

「大佐。何故、私に与えられる艦がこのような色で塗装されているのでしょうか」

俺は何かイライラを抑え、改めて理由をきいた。

すると大佐は犯人の名を恭しく告げた。

「これはキシリア閣下のご配慮だ。

私としては羨ましい限りだよ中佐」

「キシリア閣下……」

この色からして予想して然るべき名前だった。

閣下の好意をむげにできるジオン軍人は、はたして何人いるだろうか。

その中に俺がないことは確かだ。

「そうだ。ところで中佐、まさか私への要件が艦の色の種類を聞くだけではないだろうな」

上官を前にして考え込んでいた俺に、大佐は笑顔で尋ねてきた。

俺はとっさに言葉を飲み込んだ。

冷静に考える上官を呼びつける理由が全くない。

俺は焦りを抑えつつ、クルマ大佐に謝った。

「申し訳ありません大佐。艦の迷彩があまりに奇抜だったもので、取り乱してしまいました」

「なるほど、今やキシリア少将の信頼が厚く、飛ぶ鳥を落とす勢いの中佐も人の子だったようだな」

そう言ってハルマ大佐は笑うと、隣に立つ技術大尉に声をかけた。

「君は任務に戻れ。ハウペン中佐は私が案内しよう」

笑顔でそう言うハルマ大佐の声が、妙に俺を不安にさせた。

## 第16話、技術屋の意地

ハルマ技術大佐と二人きりになると、俺はあらためて塗装中のムサイ級巡洋艦ヴィルベルウィンドを見つめた。

「ハルマ大佐にお願いがあります」

「ふむ。何かな」

「この艦の塗装ですが、少し遅らせていただけないでしょうか」  
俺は悩みながらも切り出した。

「別に構わないぞ。塗装など宇宙に出てからでもできるからな」  
ハルマ技術大佐は予想外にもあっさりと承認してくれた。

時間が稼げた安堵感でいっぱいになり、俺は礼を言おうとした。  
すると、それを遮るように今度は大佐がヴィルベルウィンドを指  
差した。

「ところでハウペン中佐、私も君に聞きたいことがある。

もしこの艦の改良を君が任されたらどうするかね」

「私に権限があればですか？」

……そうですね、まず機関砲の増設やモビルスーツの運用面で改

良を加えたいですね」

その瞬間、単なる人の良さそうなおっさんだった、ハルマ技術大佐の表情は一変した。

その目は光り輝き、スーツと細まっっていく。

「それは実働部隊の士官としての意見だなハウペン中佐」

ハルマ技術大佐の声には、明らかに過剰な熱がこもっていた。

この話題を振ってきたのは、何かの罠かもしれない。

大佐の熱意に比例して、俺の不安はどんどん増大していく。

「はあ、その、幾つかの教訓から思ったことではありません」

「なるほどな。」

実はこの件について、私は以前からハウペン中佐と意見の交換をしたいと思っていたのだ」

ハルマ技術大佐の言葉に、俺はあいまいに頷いた。

すると、ハルマ大佐は力いっぱい俺の左腕を掴み、持論を語り始めた。

文句を言いたいが技術大佐とはいえ大佐は大佐であり、俺は不満を抑え、冷たい視線を浴びせるに留めた。

そしてハルマ大佐は俺の氷の視線に気づかずに、圧倒的な早口で持論を主張し続けたのである。

だが、その内容はジオン軍人なら誰もが知っていることだった。

まあ、全てはミノフスキー粒子が発見されたせいだ。

かつて艦艇は全天の敵をレーダーで捉え、誘導ミサイルと主砲で敵を攻撃できた。

そして迫り来る複数の敵の戦闘機とミサイルを、コンピューターで同時に識別し、迎撃ミサイルと高速旋回可能で速射能力を有する少数の機関砲で迎撃していたのである。

これ等は極めて効果的だったが、電波や一部の可視光線、赤外線レーダーなどの波長を阻害するミノフスキー粒子の性質が全てを変えた。

それは通信及び広域索敵を著しく困難にした。

それは艦艇の火炮と連動した照準システムを無力化し、捉敵速度や命中精度を著しく低下させた。

それはミサイルから誘導能力を奪った。

ハルマ大佐の演説の主旨は、その中でも無力化した防衛システムについてだった。

件の粒子はレーダーとコンピューターで自動化されていた部分を、人に頼る旧式の反応の遅いシステムに退化させた。

にもかかわらず現在のムサイ級巡洋艦は、未だにかつてと同じ数だけの機関砲しか有していないのである。

その改善を重要視したのが、目の前で語るハルマ技術大佐であり、その背後にいる軍の技術本部らしい。

「わかったかね。ハウペン中佐」

話半分に聞きながら考えをまとめていると、クルマ大佐はようやく話を終えたようだ。

結局、彼等の提案は、俺でも思いつくような艦艇の小口径火砲を増設するという単純なもの……

だが、それだけに効果が期待できた。

「ハルマ大佐の考えに私も同感です」

やっと得た左腕を救うチャンスを棒に振り、俺は同意のみを口に出した。

これは艦の乗員の命に関わる問題であり、ムサイで戦場に出る可能性が俺に少しでもある以上、生存率は非常に気になる。

「そうか。それでは前線指揮官として、防衛能力の強化案を支持してくれるかね？」

「もちろんです。これはすぐにも実施すべきだと思います」

ハルマ大佐は満足そうに頷くと、俺の腕を解放した。

「ありがとうハウペン中佐。非常に心強い意見だ。」

そこで君にしかできない頼みがある」

ハルマ大佐はじつと俺の眼を見つめた。

「頼みとは？ 何でしょうか」

「この案をキシリア閣下に伝える役目を引き受けて貰いたい」

はっ？ ……誰がキシリア閣下に伝えるって？。

「残念ながら艦政本部及び技術本部の提言は既に却下されている。

そこで我々はキシリア閣下の信頼が厚い、ハウペン中佐を頼るところにしたというわけだ」

もともとムサイには2つの改良計画があった。

技術本部の押す、防御火力を増強し戦闘能力を単純に底上げをする計画。

そして宇宙攻撃軍の推す、低防御力を我慢してでも量産性をアップする計画だ。

一度ジオン軍は後者を採用した。

だが統合整備計画の余波はムサイ改良計画にも及び、再び技術本

部が近接火器の増強案に乗り出したそうだ。

「以前に却下された案を再び私が提案するのですか」

「今回は違う。これを見たまえ」

大佐が見せたのは、技術本部の提言のタイトルだった。

『ムサイ級巡洋艦の火器増強及び量産性向上計画』

俺は悟った。

前者はともかく後者の主張は詐欺みたいなものだろう。

「これは技術部門の総意でもある」

ハルマ大佐は無言を言わさない口調で念を押す。

「……しかし、何故、私なのでしょうか」

ハルマ大佐は思わせぶりに表情を緩めた。

そして右腕を素早く上げて俺の左胸を指差した。

「最初に言った通り、君がザビ家のお歴々に高く評価されているからだ」

俺は思わず自分の左胸を見て、小さく呻いた。

すぐに気づくべきものかもしれない。

第一級国家功労章。最近貰ったこの勲章に俺はうんざりした。

だが、是非ともお近づきになりたい技術本部に、恩を売れるチャンスを、この勲章が運んできたとも考えられる。

「成功は約束できませんよ、大佐。ですが私の方で動いてみます」

結局、ハルマ大佐の訴えに頷いた。

「ありがとうハウペン中佐」

大佐は深々と頭を下げた。

下位の者にこれだ。よほど切羽詰まっていたのだろうか。

顔を上げた大佐は最初に出会った時と同じように、人柄の良さそうな笑顔を浮かべていた。そして……

「なーに、ミノフスキー粒子の特性に着目したザビ家の方々は、それだけでも偉大だ。

懇切に説けば、その先見の明が艦艇にも発揮されるだろう」

大仕事を押し付けて安心したせいか、他人言みたいな大佐の言い方が、妙に腹立たしい。

俺はその気持ちを押し殺し、問題点を一つ指摘した。

「その前にマ・クベ少将に事情を説明し、支持を取り付けねばな

りません」

「マ・クベ少将だと？」

話をこれ以上ややこしくするわけにはいかない」

露骨に顔をしかめて、ハルマ技術大佐は反対した。

マ・クベはマ・クベだから気持ちは分らないでもない。

だが、突撃機動軍の副司令官の支持は間違いなく必要不可欠だった。

それに軍という組織を動かすには、然るべき根回しが重要だと思うが……

技術屋の大佐は、何故かその現実を理解したくないらしい。

「マ・クベ少将は私が説得します」

俺は無無を言わさない口調で断言した。

「その上でハルマ技術大佐には、私とマ・クベ少将がキシリア閣下を説得する際、技術的な裏付けをして頂きたい」

「わ、分かった。もちろん私はいつでも協力するつもりだ」

俺は舌打ちをしたいのをこらえ、小さく礼を言った。

そして、今のやり取りで多少主導権を得たと判断し、幾つかの相談を持ち込むことにした。

「ところで大佐、モビルスーツの発進を容易にするカタパルトの開発は、どうなっているかご存知ですか」

「カタパルトか……」。

あれの開発自体は終えた。おそらく新型艦へ搭載することになる」

「ムサイの改良計画に、モビルスーツ発着用甲板と前方射出型カタパルトの設置をねじ込めませんか」

「……………」

大佐は絶句して俺を見つめた。

外付けの甲板と前部射出型のカタパルトを新たに設計した上で、ムサイの艦体に設置する費用と手間はばかにならない。

これは技術本部が苦心して手に入れた、量産性向上という看板を犠牲にすることにもなる。

ハルマ大佐は両腕を組み、しばし考え込んだ。

「火器の増強問題でもわかるとおり、公国軍上層部は量産性を阻害する案の採用に二の足を踏むだろう」

「そうですね」

それが何かと言わんばかりの相づちを打ってやった。

「だからこそ技術本部も近接防衛火器の増強に的を絞ったのだ」

「大佐！、何も全艦にそうせよと言うわけではありません。数隻の試験艦の予算を確保しましょうと申しているのです」

大佐は腕を組んで悩んだ。

「少しここで待っていてくれ」

ハルマ大佐はそういうと歩み去った。

やがて戻ってきた大佐の顔は晴れやかだった。その答えは明らかだろう。

「ハウペン中佐の意見は採用された」

「ありがとうございます」

俺も負けずに満面の笑顔を浮かべた。

「それから、ハウペン中佐宛ての伝言だ。

技術本部は統合整備計画のおかげで大混乱である……以上だ」

「……その、申し訳ありません」

俺の笑顔はしぼんだ。

そもそもこの件で謝る必要などない。

だが、何故か俺は反射的に頭を下げていた。

立場は元に戻った。

ハルマ大佐はそんな俺を見て、ニヤリと笑うと右手を軽く振る。

「冗談だよ」

どこかからが冗談かさっぱりわからない。

だが、大佐の人の良さそうな笑顔に、俺は二度と騙されないと心に誓ったのであった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5622p/>

---

独立戦争 ハウペン編

2011年12月7日07時46分発行